
機動戦士ガンダム0087～蒼天の戦士たち～

umbrella-tail

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム0087 蒼天の戦士たち

【Nコード】

N3963L

【作者名】

umbrella-tail

【あらすじ】

ダカール演説から第1次ネオジオン戦争までの18TFASの活躍をオリジナルキャラクターと原作キャラクターを交えて描きます。アニメには矛盾しないよう書いていく予定ですが、それ以外は尊重しつつも致し方ない部分は無視する方向性で行きます。

設定資料・オリジナルキャラクター編（前書き）

容姿が未定のキャラの容姿の案やオリジナルキャラは随時募集中です。

設定資料・オリジナルキャラクター編

フレデリック・ブルックナー

年齢：20↓21（0087時） 性別：男 身長：169cm

出身：地球、オーストラリア

髪型：ウェーブのかかった色の薄い茶色 瞳の色：茶

所属：地球連邦地上軍↓カラバ 階級：少尉

愛称はフレッド

一年戦争のコロナー落として家族を失うも、アメリカに留学していたため生き延びる。

アレックスとはハイスクール時代からの同期で寮のルームメイト。士官学校時代からバディを組むことが多く、チームワークは抜群

アレクサンドロス・コールマン

年齢：20↓21（0087時） 性別：男 身長：176cm

出身：地球、アメリカ

髪型：茶髪のアート 瞳の色：青 ロシア系

所属：地球連邦地上軍↓カラバ 階級：少尉

愛称はアレックス、作中では長いためフルネームで書いてもらえない。

フレッドとは4年前ハイスクールの寮でルームメイトになって以来の親友。

明るいムードメイカー的な性格

イアン・デボルト・ヴァルモール

年齢：28↓29（0087時） 性別：男 身長：180cm

出身：サイド1

髪型： 瞳の色

所属：地球連邦軍↓カラバ 階級：大尉

一年戦争とデラーズ紛争を戦い抜いたベテランMSパイロット。
戦車乗りから転向した経緯を持つ。

タンDEM・ライネス

年齢：23↓24（0087時） 性別：男 身長：174cm

m 出身：地球、イギリス

髪型：ウェーブのかかった長めのブロンド 瞳の色：青 イギリス系

所属：地球連邦軍↓カラバ 階級：中尉

アムロがシャイアンの士官学校で勤務していた際の教え子で、アツシマーのテストパイロット勤めたこともあり、Zプラスも短時間で乗りこなすなど若いながらその腕は一流。
真面目を絵に書いたような性格。

アルバート・サック威尔

年齢：26↓27（0087時） 性別：男 身長：176cm

出身：サイド3

髪型：ぼさぼさの黒髪 瞳の色：茶

所属：ジオン公国軍↓カラバ 階級：中尉

一年戦争時の地球降下作戦で地球に降下しそのまま潜伏を続けた残党兵の一人。

サミュエルとは一年戦争時からの上司と部下の関係。

サミュエル・フェルナンデス

年齢：26↓27（0087時） 性別：男 身長：169cm

出身：サイド3

髪型：赤毛の短髪 瞳の色：緑

所属：ジオン公国軍↓カラバ 階級：少尉

一年戦争時の地球降下作戦で地球に降下しそのまま潜伏を続けた残党兵の一人。

テッド・エマーソン

年齢：25↓26（0087時） 性別：男 身長：179cm

出身：月、フォン・ブラウン

髪型： 瞳の色：

所属：地球連邦軍↓カラバ 階級：大尉

アナハイムに出向していたテストパイロット。

年の割りに実戦経験が豊富な腕の立つパイロット。

ルーク・エルフィストン

年齢：23↓24（0087時） 性別：男 身長：170cm

出身：サイド2

髪型： 瞳の色：

所属：地球連邦軍↓カラバ 階級：少尉

アナハイムに出向していたテストパイロット。

実戦経験は少ないが、教本に忠実な丁寧な操縦をするパイロット。

エレン・キシマ

年齢：15↓16（0087時） 性別：女 身長：159cm

m 出身：地球、日本

髪型：黒髪のセミロング 瞳の色：黒

所属：ホンコンのハイスクール

民間人の少女、ホンコンに疎開していたところをティターンズの襲撃にあうがフレデリックに助けられるという経緯でアウドムラに同乗し、メカニックの手伝いや雑用をしている。
明るく世話焼きな性格。

セルジ・マルティン

年齢：35↓36（0087時） 性別：男 身長：167cm 出
身：地球：オーストラリア
髪型： 瞳の色：
所属：地球連邦軍↓カラバ

アウドムラのチーフメカニック

ハインツ・ワンボルト

年齢：30↓31（0087時） 性別：男 身長184cm 出
身：地球、カナダ
髪型：黒髪の直毛で短く切り揃えている 瞳の色：黒 アフリカ系
所属：地球連邦空軍↓地球連邦宇宙軍↓ティターンズ 階級：大尉

一年戦争以前から軍に所属しているベテランMSパイロット、戦闘機乗り上がり。

義理堅く部下思いの人物で、彼を慕っている部下は多い。

宇宙でのサイド2でのG3ガスの使用など宇宙でのティターンズの暴挙に憤りを覚えているが、地球圏の治安維持というティターンズの大儀に誇りを失ってはいない。

エリカ・ドーソン

年齢：18↓19（0087時） 性別：女 身長：155cm
出身：不明
髪型：プラチナムブロンドのロングストレート 瞳の色：濃い青

北欧系

所属：ティターンズ 階級：准尉

強化人間の少女。

人見知りをするため、心を開いた相手でなければあまり感情を見せない。

U・C・0084年以前の記憶を失っている。

カーティス・オルソン

年齢：26↓27（0087時） 性別：男 身長：174cm

出身：カナダ

髪型：色が濃い茶髪の天然パーマ 瞳の色：青

所属：ティターンズ 階級：中尉

ハインツの部下、愛称はカート。

一年戦争とデラース紛争を戦い抜いたベテランパイロット。

スティーブ・エリアス

年齢23↓24（0087時） 性別：男 身長：175cm 出

身：フィンランド

髪型：ブロンドの短髪 瞳の色：緑

所属：ティターンズ 階級：少尉

ハインツの部下。

デラース紛争を戦い抜いたパイロット。

アリサ・アクロフ

年齢：22↓23（0087時） 性別：女 身長： 出身：ロシア

髪型：茶髪のショートカット 瞳の色：茶

所属：ティターンズ 階級：少尉

ハインツの部下、実戦経験は少ないが腕の立つパイロット。

クルツ・フォード

年齢：32↓33（0087時） 性別：男 身長：172cm

出身：地球、オーストリア

髪型：黒の天然パーマ 瞳の色：茶

所属：地球連邦軍↓ティターンズ 階級：曹長

ベテランのメカニック。

レナルド・ベレンス

年齢：29↓30（0087時） 性別：男 身長：183cm

出身：ドイツ

髪型：プラチナブロンドのストレート 瞳の色：緑

所属：地球連邦軍↓ティターンズ 階級：大尉

一年戦争以前からの叩き上げのスナイパー、その腕はMSに搭乗しても一線級の腕を誇る。

第0話 キャリフォルニアベースの朝（前書き）

オリ主人公、半オリ設定です。苦手な方はご注意ください。

第0話 キャリフォルニアベースの朝

U・C・0079、1月10日

――幾筋もの流れ星が夕暮れの空を彩る

――数は多いけど、それ自体は別に珍しいことじゃない

――だけどその中心にあるものは明らかに異常だった

――映像で見慣れた人工の大地との一部とわかる物体

――それが流れ星たちを誘うかのように高度を下げていく

――その光景はまるで……

――宇宙が、落ちる……

U・C・0088、11月19日　キャリフォルニアベース

「フレッド少尉、あと15分でミーティングの時間だぞ」

ここ数ヶ月で聞きなれた声で我に帰る、どうやらまどろんでいたようだった。

眉間を摘みながら何とか眠気を追いやろうとするも、アムロが渡したコーヒーのおかげでその努力は徒労に終わった。

「ん……アムロ大尉、申し訳ありません」

そういつて彼は猫舌を我慢しつつ、まだ熱いままのコーヒーに口をつける。エスプレッソにスチームミルクを混ぜたカフェ・ラッテは程よい苦味とカフェインが脳を目覚めさせる。

「ブラックのほうが良かったかな？」

アムロが聞く。

「大丈夫です、朝はミルク派なんです」

胃が弱い彼にとって空腹時のブラックコーヒーは劇物だった。刺激が強すぎるコーヒーは彼の胃を傷つけ腹痛をもたらす。

「ならよかった、それを飲んだら早くこいよ、もう外じゃ作業が始まってるみたいだしな」

「了解です、5時には間に合わせます」

眠気を吹き飛ばすかのように立ち上がり、かつちりとした敬礼で返事をする。

そしてアムロが去っていったのを確認してから、まだ熱いままのコーヒーを持ったままアウドムラのMSパイロット、フレデリック・ブルックナー少尉はブリーフィングルームを後にするのだった。

（また……あの夢か……）

シャワーを浴びながら彼は心の中でぼやく。

——コロニー落とし、ジオンが一年戦争初期に行ったブリティッシュ作戦の成果だ。その時フレデリックは家族を失った。

偶然内陸部にいた自分だけが生き残ってしまった、その事実は今も彼を苦しめる。

その時から彼はこの夢を見るようになった。今でこそ回数は減ったが、それでも週に一度はこの夢を見ている、彼も一年戦争で心に傷を負った一人であった。

悪夢を振り払うかのように、彼は自らの頬を張る。

「……よし、いつもの俺だ」

自らに言い聞かせるようにつぶやいてシャワールームから出ると、そのまま制服に着替えはじめた。

制服とは言つものの、ただ普段着に揃いのジャケットを重ねるだけという極めて簡単なものだ。しかしカラバといえども半分以上ゲリラである。制服があることだけでも十分だろう。ブリーフィングルームに入ると、すでに大半のパイロットが集まっていた。

「ようフレッド、お前にしちゃ遅いな」

アレックスがフレデリックの背中を無遠慮にたたく。

「まったく……俺だつて寝坊くらいするさ、それにしても相変わらずお前は元気だな」

「新型機がくるんだから当然だろ、むしろお前は何でそんなに落ちて着いてるんだよ」

「4年も共同生活してるやつが言うことかよ、俺の寝起きが最悪なことぐらい分かってるだろうに」

そういつつフレデリックは空いている席に腰掛けた。フレデリックが座つて間もなく、ブリーフィングルームのドアが開きアムロ大尉が入ってくる。その後ろにはA.E.社のエンジニアらしき人物とスポンサーと思われる痩せ形の男も一緒だった。

それは今回の補給によって試験的に配備されるMSの特殊性に問題があった。

“Zプラス”、エウーゴが主体となつてアナハイム社で建造された最新鋭可変MS、Zガンダムの量産前提の再設計機で、量産機ながら性能自体はむしろ向上している。

抗争が始まった当初から鹵獲したアッシマーを運用している部隊もあったが、A E社の最新鋭機種のアモースタイプは初めてでありその配備直前のミーティングだ、A E社のスタッフらしき人間も混ざっているのも当然だろう。

ミーティング終了後、補給物資搬入の手伝いをするため彼らはMSデッキへとむかった。

エウーゴよりは人的資源が豊富なカラバといえども人手不足には変わりがなく、補給の際はほとんど総動員状態となるからだ。

「はあ、教官はタンデム中尉か……アムロ大尉ならよかったのにな」

「別にタンデム中尉なら安心だろ、アムロ大尉の直弟子じゃないか」首を鳴らしながら答えるフレデリック。シャイアンの士官学校でアムロに実技を学んだというタンデム中尉なら文句はないだろうと思う彼だったが、アレックスは不満なようだった。

「別に不安なわけじゃないさ、まっ、おれとしてはZ^{ガンダム}プラスに乗れるだけでも十分だよ」

アレックスは新型の配備に素直に興奮している様子だったが、対照的にフレデリックは憂鬱だった。

ZガンダムやZプラスはウェイブライダーと汎用型MSの二つの性能を備えた高性能可変

MSである、しかしその特性上大きな問題が二つあった。

まず一つ目に整備性の悪さがある。変形により全く違う性能の機体へと姿を変えるZタイプは非常にフレーム構造が複雑であり、ネモやリック・ディアスなどの第二世代MSと比較するとどうしても整備にかかる時間がかさんでしまう。

もう一つに、操作性の悪さがあった。アッシマーをはじめとする一般的な可変MSや可変MAであれば、一般の訓練しか受けていないパイロットにも操縦可能だっただろう。しかしZタイプはウェイブライダーに変形する関係上、変形時の速度が並みの戦闘機や可変機よりも非常に速い上に変形する際コクピットが回転するというのもあり、方向感覚が狂いやすくよほどの技術を持ったパイロットでない限り乗りこなすには相応の訓練を必要とする。

フレデリックが素直に新型に興奮できないのもそこに理由があった、彼にはシミュレーションである程度の成績は残すことが出来たため養成組には選ばれたものの、訓練が終了するまで実戦に参加することが出来ないからだ。

アレックスも同じなのだが、本人は全く気にしている様子はない。

「すげえ、あれがZ^{ガンダム}プラスか！」

興奮しきつてる様子のアレックスは年甲斐もなくZプラスの元へ駆けていった。

フレデリックもアレックスの後を追うように歩を進める。

彼自身はパイロットの習性なのだろうか、無意識のうちに機体を観察していた。リックディアスの流れを感じさせる大きな目の脚部、腕部は百式に近いだろうか……

ふと上を見上げると、目前に直立している巨人と目が合う。

MSと目が合ったという表現は正確に言うと間違いだろう、しかしフレデリックはそう感じたのだ。人の顔のように見えるデュアルアイセンサーを備えた頭部は静かにその足元を見下ろしていた。

「ガンダム……か……」

そうつぶやきながら彼は物資搬入の手伝いにむかった。

補給作業が一段落着くと、時刻も離陸予定時刻である7時まで残り1時間を切ったこともあり、フレデリックをはじめとするパイロット組は機体整備のため作業から解放された。

しかし、パイロットのやることと言えば調整程度だ、要は休んでおけということである。

とはいえ配備直後のMSがある分、機体コードの登録などやらなくてはならない事は少なくない。

フレデリックが自分のネモのコクピットに収まり、機能チェックのために各種センサーを作動させると、突然外から怒号が聞こえてきた。

「パイロットがないとはどういうことだ！」

声の聞こえたほうを見ると、そこには朝のミーティングで顔だけ見せたAE社の男がいた。痩せ型であるところからウォン・リーだとわかる。対応をしているのは連邦軍からカラバに参加しているイアン・デボルド・ヴァルモール大尉だ。

「いえ、いないわけじゃありません。ただMSと航空機の両方をこなせるレベルじゃないと……」

「養成などやっとする暇はない！！どうにかできんのか！」

ウォンがイアンに食って掛かる。

「ゼータは乗りこなせばいい機体ですよ」

横で見ていたアムロが割っては入り、ウォンをなだめるように言う。

「複座のB型が出来るまで、僕がテストパイロットをやりますよ。ウォンさん」

「……君がそう言うなら、任せよう」

収まりがついたのか、ウォンはエレベーターの方へ去っていった。

「助かりましたよ、アムロ大尉」

イアンが頭をかきながらアムロに礼を言う。こころなしかその顔はげっそりしているように見える。

「気にしないでくれ、あの人に付き合っていたら日が暮れてしまうからな」

アムロが妙に実感のこもった声で言う、彼もウォンの短気さには辟易とさせられることがあったのだろつ。

「違う。ところでアムロ大尉は航空機の操縦も出来たんですかい？」

「輸送機をアッシマーにぶつけるぐらいはやったことがあるな」

冗談めかして言うが、実際やって見せたことなのだから性質たちが悪い

「マジかよ……さすがは白い悪魔ってところですね」

驚いた顔をしながらイアンが言う。

「その名前はやめてくれ、一年戦争の事はあまり思い出したくない……」

アムロは苦い表情でうつむく。その瞳はどこか遠くを見ているようであった。

第0話 キャリフォルニアベースの朝（後書き）

初めての投稿となりましたがいかがでしたでしょうか？

既存のガンダム作品との矛盾点をあつた場合ばしばし指摘してください。

更新頻度は低くなると思いますがお付き合い願います。

第1話 始まりの空

U・C・0087、11月19日 キャリフォルニアベース

二本の戦闘機用の電磁式カタパルトが展開し、空へとレールを掲げていく。

展開が完了し、ロック機構の作動音がすると同時に内部からウェイブライダー形態のZプラスが姿をのぞかせる。

『こちらユニコーン01、カタパルトスタンバイ。発進許可を求む』

「こちらキャリフォルニアコントロール。ユニコーンチーム、発進を許可する」

『了解。アムロ、Zプラス出ます』

『タンDEM機、Zプラス発進します』

カタパルト脇に設けられたランプがすべて緑に灯ると同時に、青とグレーの二機のZプラスが空へと飛び立っていく。

「キャリフォルニアコントロールよりユニコーンチームへ、トライアルを開始せよ」

『了解。これよりトライアルを開始する』

アムロはサブモニターに表示されたメニューを確認し、急旋回や背

面飛行など機体に負荷のかかる機動を繰り返す。そのアクロバットな飛行は今では見ることも少なくなった戦闘機による曲芸飛行を髣髴とさせた。

やがてトライアルのメニューも数個を残し終了する。

『こちらユニコーン01、一気に空力限界高度まで持っていく。遅れるなよ』

『了解！』

タンデムの返事と同時に2機が急上昇をかける2機。推力比2を超えるZプラスは2分とかからずにジェットエンジンで到達可能な最大高度である空力限界高度に達することができる。

しかしそれはあくまで理論上であり正確な数値は実際に飛ばしてみないと正確にはわからないためテストする必要があった。

『く……う……う……』

『く……う……う……』

これはそのためのものだが、最大出力での加速を行うためにパイロットにも機体にも負担がかかってしまう。

『空力限界高度まで……あと……20……10……ゼロ……』

高度30kmに到達したZプラスが上昇を止め水平飛行に移る。もつとも高度30kmでは大気が極めて希薄でジェットエンジンがともに機能する限界領域であり、もともと戦闘機ほど揚力を得るこ

とができるように設計されていないZプラスは僅かな揚力とエンジンパワーに物を言わせて強引に飛んでいた。

『宇宙か……』

アムロが低く呟く。その言葉には万感の思いがこめられているように聞こえた。

『静かですね』

『ああ、だが……』

ゆつくりと大気上層に目をやるアムロ

『……汚れたものだ、8年前はもっと澄んでいた』

『大尉……』

アムロがこの大気上層をはじめて見たのは8年前の10月ごろだった。しかしその後の地上から脱出したジオンを連邦が駆逐するたびに衛星軌道は汚れていった。

戦後も散発的な戦闘は後を絶たず、今も宇宙は汚れ続けている。

しばらくの間沈黙が続く、だが時間はすぐに現在を過去へと押しやっっていく。

『そろそろ時間だ、戻るぞ』

『了解！』

タンデムの返事と共に二機のZプラスが一瞬だけMS形態へ移行し反転し、再びWRへと姿をかえ一気に降下を開始する。

高度が下がることに大気が濃密になっていき、それに比例してエンジン出力が本来の値を取り戻していく。

『こちらユニコーン01、全メニューを完了した。着陸許可を求む』

「こちらキャリフォルニアコントロール、確認した。第一滑走路へ着陸されたし」

『了解。ユニコーンチーム、これより帰還する』

着陸許可を得た二機はMS形態へ変形し、アウドムラが駐機されている第一滑走路へ軟着陸するのだった。

アウドムラのハンガーに固定されたZプラスからアムロとタンデムが昇降用リフトを降りてくる。

それを迎える整備班からドリンクチューブを受け取り、整備班から一歩下がった位置で端末を操作しているキム・ハル主任の元へ向かう。

キムはZプラスのソフトウェア担当主任であり、AE社とカラバとのパイプ役を果たしたのも彼とウォンであるためアムロとの面識があった。

「久しぶりだな、キム主任」

「こちらこそ、それよりもZプラスをさわった感想を聞かせてください」

挨拶もそこにZプラスに乗った感想を聞いてくるキム、彼も生粋の技術屋の一人であった。

「いい機体だ、WR時の機動性はアッシマーや戦闘機に劣るが速度で簡単に振り切れる。ただMS時がピーキー過ぎるな、あれはどうにかならないか？」

「テール・スタビライザーが一本な以上ある程度は仕方ないんですよ、ソフト面での改良はこれからも続けますがね」

キムが頭を掻きながら言う。ロング・テール・スタビライザーを採用しているZ系MSはMS形態でのスラスターの配置がピッチ方向へ偏っている上、背部にロール、ヨー方向への挙動を安定させるための偏向スラスターノズルを装備したバックパックを持たないためティターンスの第3世代MSと比べると、ロール、ヨー方向への機動性能が若干劣るのだ。

それをカバーするためにZ系のMSが宇宙空間で戦闘を行う場合AMBACを駆使した一撃離脱戦術が取られるが、大気圏内ではAMBACも効果が薄いため前述のZ系特有のピーキーさが大きく出てしまっているのだ。

アムロとタンデムから感想を聞き、トリアルで取れたデータが入ったメモリーディスクを受け取るとキムは整備班の方へと去っていった。

第1話 始まりの空（後書き）

Z系のピーキーさに関してはどうピーキーなのか書かれている資料が見当たらないため完全な独自解釈です。

Zプラスの推力比に関して

Zプラスの装備にはビームスマートガンが含まれているため、全備重量にはもちろんビームライフルを含めた全ての武装を装備した状態であることが考えられるため、全備重量である77tからビームスマートガンを引いた重量を55tとして計算して推力比2以上としています。

第2話 アウドムラ発進（前書き）

間隔があいてしまいましたが第2話です。

第2話 アウドムラ発進

U・C・0087、11月20日、キャリフォルニアベース

キャリフォルニアベースは夜間に降り積もった雪により一面が真っ白になっていた。

本来キャリフォルニアは温暖な気候であり雪が降ることなど滅多にないが、二つのコロニーが落着いた影響は小さい訳がなく、安定しない天候はキャリフォルニアに雪を降らせたのだった。

旧ジャブロー基地やダカール基地のようにガルダ級を収容できる格納庫が存在しないため、アウドムラが占有する形になってしまっているキャリフォルニアベース第二滑走路ではカラバのメンバーによる除雪作業が行われていた。

「はあ、冷えるな……」

フレデリックは除雪機を取り付けたエレカで滑走路を走りながら一人ぼやく。フライトジャケットを着込んでいるとはいえ、雪が降った直後ではさすがに寒さを抑え切れないようであった。

『フレッド、ハヤト館長が車をご所望だ。早く戻って来い』

アレックスから通信が入る。フレデリックはアウドムラの機内で積荷の整理をしているアレックスが少しだけうらやんだ。

「5分で戻る」

そう短く答えると、彼は再び作業に戻った。

雪が積もっているとはいえ元はキャリフォルニアだ、そこまで深く積もることはなく作業は滞りなく進んでいく。担当区画の除雪作業を終えたフレデリックは、エレカを所定の位置に戻しアウドムラのカーゴブロックへ戻った。

「おつかれさまです、フレッド少尉」

黒髪の少女がエレカから降りてきたフレデリックにホットココアを渡す。

「ありがとう、エレン」

フレデリックがエレンと呼んだ少女ははにかみながらも笑顔を見せる。彼女はフルネームをエレン・キリシマといい、ニューホンコンでフレデリックが保護した民間人であった。

「エレン、俺にもココア頼むよ」

アレックスがエレンにココアを催促する。

「はい、アレックス少尉」

「ありがとう」

渡されたココアをすすりながらアレックスが礼を言う。

「ところで少尉たちはまだZプラスには乗らないんですか？」

「ん、ああ……アムロ大尉とタンDEM中尉の機動試験が終了してないし、アムロ大尉みたいに慣熟訓練なしでいきなり可変機を飛ばすなんて無理だから」

アレックスが説明する。実際ドダイなど超音速機の操縦経験がある彼らだが、音速を超えた速度で飛行する可変機は操縦経験がなく、乗り換えてすぐに乗りこなすということは不可能だった。

もともとアレックスやフレデリックのように戦闘機とMSどちらも操縦することができる人間は、エウーゴに比べ人員に余裕があるカラバとはいえそう多くいるわけではない。

「で、そのパイロット養成のために組まれているのが複座のB型ってわけ」

そう説明を閉めると、アレックスは若干冷めてしまったココアを一気に飲み干すのだった。

アムロとタンDEMの駆るフル装備のZプラスがトライアルのために出撃する。

昨日は急激な加速、旋回などカタログスペックを確認する意味合いが強いトリアルだったが、今日のメニューは敵弾回避能力および空戦能力を検証するための演習攻撃と模擬戦が主な内容であった。

『こちらユニコーンチーム、まもなく目標空域に到達する』

「こちらキャリフォルニアコントロール、演習攻撃部隊としてギャ

プラン改6機を演習空域に投入する。これを全て迎撃せよ」

管制塔からの通信が終わると共に、ギャプラン改が戦闘機用カタパルトより順次発進していく。

ギャプラン改はオーガスタ研究所が開発したギャプランの発展型であり、A L I C E に類似したA I が搭載されている無人M A である。

12月初頭には各地のカラバ部隊に計20機が配備される予定の機体だが、試作機として生産されたバルカンポッド非搭載型の6機が今回のテストに投入された機体だ。

『こちらユニコーン01、了解した。タンデム、用意は良いな?』

『もちろんですよ、大尉』

タンデムが親指を立てて余裕をアピールする。

『来るぞ、ブレイク!』

アムロの指示と同時に2機のZプラスが急旋回と共に散開する、ギャプラン改部隊も編隊を解除し模擬弾頭を搭載したミサイルの一斉射撃を仕掛けながら急激に接近してくる。

ミノフスキー粒子の影響下とはいえ、6機のギャプラン改による一斉射撃は密度の高い弾幕となりアムロとタンデムのZプラスに襲い掛かった。

タンデムは自機に急上昇をかけながらM S 形態へと変形させ、Z系の特徴である出力が高いビームライフルで——もちろん実際に撃つ

ているのは照準用レーザーだが——ミサイル郡を薙ぎ払っていく。被弾を感知した模擬弾は次々と爆散していった。

逆にアムロは変形を繰り返しながら最大加速でミサイル郡の中を縫うように突進していく、近接信管も相対速度が速すぎて作動していなかった。

弾幕を潜り抜けたアムロのZプラスは1機のギャプラン改をすれ違いざまに頭部60mmバルカン砲のペイント弾で染め上げ退場させると、その勢いのままバック転の要領で背後を振り返り、2機目のギャプラン改を腰部ビームキャノンの照準内に収める。

『……』

次の瞬間には新たな敵機を追うべくWR形態に変形し、その場を離脱していた。

「すげえ……」

「ああ、さすがはアムロ大尉だな」

それぞれのネモのコクピットで待機していたアレックスとフレデリックは感嘆の声を上げていた。今までも何度もその超人的な腕に救われることがあったが、こうやって新たな機体を得たアムロはいつもにも増して強く見えた。

「いくら無人とはいえギャプランを一瞬で2機かよ……」

以前からギャプランに苦戦していたアウドムラのMSパイロットとしては驚くのは無理もない、カタログスペックのみで言えばギャプ

ラン改の性能はM A形態のオリジナルギャプランを上回っているからだ。

『タンデム、俺が上空に引き付ける。後は頼んだ』

『了解！』

アムロの機体がWR形態で急上昇をかける、それを追ってギャプラン改2機が追撃をかける。タンデム機は残った1機にビームサーベルを突きつけ沈黙させ、アムロ機の直下へと移った。そのままメインスラスターを止め、仰向けのまま自由落下で高度を下げていく。

次の瞬間、アムロがビームサーベル——コクピットのモニターにしかその刃は移っていないが——を抜刀し先頭のギャプラン改に切り付ける。

ぎりぎりのところで避けるギャプランだがその陣形は完全に乱れ、その下に狙撃体制のまま自由落下をしていたタンデムのZプラスが残存する2機を照準内に収めた。

最後の2機が撃墜判定を受け基地に帰還していく。

「キャリフォルニアコントロールよりユニコーンチームへ、これよりイエーガーチームおよびハウンドチームを演習空域に投入する。全機演習空域に到達次第模擬戦を開始せよ」

『了解……タンデム、バルカンの残弾は平気か？』

『使わなくとも勝って見せますよ』

『その減らず口がきけたのなら大丈夫だな……来るぞ!』

ドダイに乗ったネモ4機を捕捉する。センサー性能で言えばZプラ
スハネモに劣るとはいえその差は20mであり、誘導兵器の有効射
程距離が著しく減衰するミノフスキー粒子の影響下においてその差
はほとんど意味を成さない。

「時間だ、状況開始」

『『ブレイク!』』

アムロとネモ隊を率いるイアンの声が重なり、キャリフォルニアの
上空をペイント弾と照準用レーザーが彩り始めるのだった。

「アウドムラは明日にもキャリフォルニアを発つそうです」

キャリフォルニアベースに程近いサンフランシスコのとあるバーに
て、体格のいい男と眼鏡をかけたビジネスマン風の男が話をしてい
た。

「行き先は分かるか？」

「ルオ商会にコンタクトを取った形跡がありますので、恐らくはニ
ューホンコンかと」

眼鏡の男が答えながら小さなメモリーディスクを男に渡す。

「これは？」

「オーガスタが提供できる最後のデータです。可能ならグリップスに送信してください」

ふむと男がメモリーディスクを懷にしまいながら言い、グラスに残っていた酒をのどに流し込む。

「確かに預かった、できる限りのことはやろう」

「頼みます、ハインツ大尉」

U・C・0087、11月21日　キャリフォルニアベース

アウドムラの発進を間近に控え、第二滑走路からはアウドムラ以外の一切の機体が退避していた。アウドムラの熱核ジェットエンジンを動かす核融合炉が、低い唸りを上げながら始動する。

『こちらキャリフォルニアコントロール、滑走路のクリアを確認した。発進を許可する』

「了解、アウドムラ発進！」

ハヤトの号令と共に、両翼に分散配置された20基の熱核ジェットエンジンから過熱された大気が吐き出される。

核融合炉の出力の上昇と共に増していく推力は、スクラムジェットエンジンとの併用で無補給で地球を二週半を飛行する力をガルダ級に与えている。

やがて、地を離れた巨鳥ガルダは蒼天の空へと飛び立っていったのだった。

第2話 アウドムラ発進（後書き）

アムロ大尉により数日の機動テストが行われたという設定から、テストと模擬戦です。

ぶっちゃけ内容はマク。スプラスです、Zプラスだけに

アウドムラの熱核ジェットの基数が10基説と20基説があるので、ガウが18基とのことなので20基説を採用しました。

第3話 遭遇戦（前編）（前書き）

一旦切ります。

第3話 遭遇戦（前編）

U・C・0087、11月21日明朝、太平洋上空

太平洋上空をを1機の大型機が雲を割って高度を上げていく。

航空機というにはあまりにも巨大な機体が水面に大きな影を落としていた。

赤く塗装されたガルダ級超大型輸送機、アウドムラである。

キャリフォルニアベースを発進したアウドムラは、香港へ向かうべく進路を東へ取っていた。

そのMSデッキでは、水平飛行に移ったことで再開された新型機の最終調整で慌ただしくなっていた。

「Zプラスのマーキングは後回しでいい、そんなことよりネモを1機でも仕上げておけ」

Zプラスの整備を行っているメカニックたちに、チーフ・メカニックであるセルジ・マルティン曹長の容赦ない怒号が投げつけられる。

他のメカニックに細かい指示を出しながらも、彼はZプラスの整備マニュアルを幾度も読み返していた。

「どうですか？Zプラスは」

振り向くと、そこにはA Eのロゴが入った作業着を着た男、キム・ハル技師が立っていた。

「いい機体だとは思いますが、整備に手間がかかるのはどうにかなりませんかね」

「低速域を揚力で飛行させようとするならこれが限界なんです、それでもオリジナルよりは簡略化されているんですよ」

キムが言う通り、ZプラスはオリジナルのZガンダムよりは簡略化されている部分が多い。

最大の変更点はフライング・アーマーの接続方式だろう、Zガンダムでは背面と平行になるように配されていたが、Zプラスでは垂直となっている。

それに加え、本体との接続アーム自体も複雑に回転しつつ展開していたZガンダムとは異なり、向きを変えず単純に横方向へ展開するのみと非常に簡潔なものに変更されていることによる構造上の余裕はそのまま強度に反映されており、信頼性は格段に向上している。

もつとも、Zプラスのものは耐熱装甲翼ではなく可変後退翼フライング・アーマー
ウイング・バインダーなのだが。

「まあ四の五の言わずに慣れるしかありませんよ、今までだってそうしてきましたからね、ハハハ……」

笑いながら言うてはいるものの、その胸中には若干の不安があった。

この戦争の初期に開発されたガンダムMk-?を始祖とするムーバ

ブルフレームを採用した第二世代MSは、第一世代MSとは根本的に構造が異なっている。

もつとも整備性に関して言えば、要求された性能を満たすために内部容積を限界まで利用した近年の第一世代MSに比べて、ムーバブルフレームのブロック構造により拡張性を重視されている第二世代MSの整備性は非常によくなっている。

しかし基本構造を第二世代MSと同じとしながらも、可変機構を備えた第三世代MSではムーバブルフレームの複雑さが第二世代MSの比ではない上に、変形によるパーツのすり合わせが非常に多いため、マグネット・コーティングの調整や消耗部品のチェックなどが格段に増えている。

その第三世代MSの中でもウェイブライダーと汎用MSの機能を兼ね備えたZタイプが、現在のアウドムラには6機も配備されている。

メカニックとしてこの事実を不安に思わない理由は無いだろう。

鮮烈な朝日が海を照らすなか、太平洋上に1隻の潜水艦が潜望鏡を覗かせている。

U型潜水艦、先の一年戦争において連邦軍が開発した潜水艦だが、開発拠点のキャリフォルニアベースがジオン公国軍の地球侵攻作戦によって制圧された際に接收され、ユーコン級としてジオン公国軍に使用されていた。

当然敗戦後も潜伏を続けたジオン残党軍の戦力としても使用されて

おり、その一部はカラバに合流していた。このユーコン級潜水艦U-148もそのうちの1隻である。

「艦長、光学カメラが所属不明のガウ改を確認」

「まずいな……アウドムラに連絡をとれ、機関停止後デコイ射出、総員第2戦闘配備だ」

「アイ・サー、機関停止、デコイ射出、総員第2戦闘配備！」

通信士の復唱が艦全体に伝えられ、ゆつくりと水流ジェットエンジンの駆動音が小さくなっていき、やがて完全に停止する。

その変化はブリッジの下に設けられたMSデッキにも伝わっていた。

決して広くはないユーコン級のMSデッキには4機のMSが鎮座している。ハイゴッグ2機にアッガイ、ズゴックEと全てジオン系MSだ。

「隊長、全機ハンドミサイルユニットの装備完了しました」

「おう、これでティターンズに一泡吹かせてやれるな」

隊長と呼ばれた男がパン、と右の拳を左の掌に打ち付ける。

ハンドミサイルユニットとは統合整備計画で開発された水陸両用MS専用の使い捨て大型ミサイルランチャーだ、統合整備計画の統一規格のアタッチメントを持つ水陸両用MSであればどんなMSも装備可能であり、後期生産型のMSのみを搭載したこの艦の艦載機は全機が装備可能であった。

アウドムラのブリッジはにわかに活気付いていた。

太平洋上に出たタイミングにあわせてブリッジ要員の交代を行っているためである。

しかし、この場の責任者であるハヤトはその限りではなかった。

今は要員の交代を見つつ、ハンバーガーをかじっている。

「オリバー、君もそろそろ戻ったらどうだ？カルロスが来るまでは代わるぞ」

「館長は一応予備パイロットなんですからそこで控えていてください」

そついいながらオリバーは通信機に併設されているプリンターから紙を抜き取り、ハヤトに渡す。

「暗号通信です、発信元はハワイ沖を航行中のU - 148」

「……ガウ改を発見か。オリバー、U - 148の現在地付近にティターンスの基地はあるか？」

「ありません、太平洋を抜けるつもりだったんじゃないんですか？」

ハヤトはあごに指を添えながらしばし黙り込んだ後、おもむろに口を開く。

「どちらにしても連邦軍でない以上ティターンズである可能性が高いな、アウドムラ飛行ルート変更、U-148を援護する。ヨコスカベースとU-148にもその旨を伝える」

「了解！」

ようやく日が昇り、太平洋の海は穏やかな青へとその色彩を変えていた。

その上空で1機のガウ改が鮮烈な朝日に照らされて機体カラーを赤く染めている。

青とグレーで塗装された海上迷彩仕様のこの機体の機首横には鷲のエンブレムがあしらわれており、その所属がティターンズであることを強調していた。

後部からは潜水艦を警戒しているのだろう、対潜レーダーが伸びている。

『こちらα1、周辺に敵影無し。索敵を続行する』

『こちらα2、同じく敵影なし』

ガウ改はその4機の艦載機の内2機を展開していた。目視による探索はミノフスキー粒子の影響下においては最も重要視される索敵手段であり、索敵ポッドが使えない重力下においてはMSがその代わりとなるからだ。

『しかし静かですね、クジラの一匹もいやしない』

『一度ガウの磁気探知装置に潜水艦らしき影が映っていたんだ、黙って警戒を続ける』

ベースジャバーを足代わりにしているギャプランに乗るハインツが、同じくベースジャバーに乗るバーザムのパイロットをたしなめる。

しばらく何事も無く飛行していた彼らだが、突然ガウ改から通信が入る。

『大尉、ビンゴだ。敵艦をジオン公国軍残党のユーコン級と断定、対潜ミサイル一斉射撃、その後ミノフスキー粒子を散布する』

通信が終わると共にガウ改からASMが射出され、海中へと突っ込んでゆく。

数回の爆発後、撃沈を示す大量の気泡の代わりに海面を突き破ったのはユーコン級から発射されたと思われる対艦ミサイルだった。

勢い良く海面から飛び出したミサイルだったが、予め散布されていたミノフスキー粒子の影響により若干射線がずれ、ガウ改はその直撃を免れた。

しかし、作動した近接信管による爆発の余波はガウ改を大きく揺さぶる。

『チツ……カートとスティープのバーザムも出撃させろ！』

ハインツの指示で2機のバーザムが、ベースジャバーを伴い上部ハッチから順次出撃していく。

『敵MSの発進を確認、各機は水中からの攻撃に留意しつつASMで攻撃してください』

オペレーターのから通信が入り、ガウ改の対潜攻撃にあわせ4機のMSはベースジャバーに懸架している2本のASMのうち1本を発射する。

ミノフスキー粒子は水中ではその効果を發揮しないため、散布後であれば空中から一方的な攻撃が可能だった。

潜水艦側はデコイに当たることを祈りつつ、MSでミサイルを迎撃する以外手段はない。

それを示すかのように水中ではU-148の周りでネモと水中用MS3機が必死にASMを迎撃している。

ユーコン級潜水艦U-148はまさに絶体絶命の危機におかれていた。

第3話 遭遇戦（前編）（後書き）

統合整備計画はマ・クベの影響力が強かった地上では早期から行われていたと解釈、よってこの作品内ではハンドミサイルユニットやジェットパックを装備可能なアッガイやズゴックが存在します。

第4話 遭遇戦（後編）

U・C・0087、11月21日 太平洋

『各機、敵母艦にハンドミサイル発射後水中から砲撃、対潜^{AS}ミサイルに注意しろ！』

隊長機のズゴッグEから指示が飛ぶ、「了解」と返事を返す声はどれも歴戦の勇者のものであった。

そして海面ぎりぎりから4機分のハンドミサイルユニットが火を噴き、ミデアとガウ改へ殺到する。

しかし、そのミサイル群は編隊から放たれたデコイと対空砲火により直撃することは無く、致命的なダメージを与えるまでには至らなかった。

『ミサイル直撃弾なし、敵編隊なお健在です』

『かまわん、先にMSを墜とすぞ』

ズゴッグEをはじめとするU・148のMS隊がメガ粒子砲で攻撃を始める。

湿度の高い海上という環境と時折発射されるビーム攪乱幕弾により母艦への有効打は望むべくもないが、ベースジャバーとMSに対しては十分有効打となりえた。

ハイゴッグの放ったメガ粒子砲が1機のベースジャバーを捕らえる。乗っていたバーザムごととは行かないもののそのビームはバーザムのシールドを吹き飛ばしていた、ベースジャバーは残されたASMを射出した直後に爆発四散する。

空中での足を失ったバーザムは僚機のベースジャバーに回収された。

『クッ……右腕稼動部が動作不良、隊長！』

発射されたミサイルは直撃こそしなかったものの、その爆発はハイゴッグのパイロットに苦い顔をさせるには十分なダメージを与えていった。

その横でもアッガイが他のベースジャバーから放たれたASMにより左腕を根本から失っていた。

『止まるな、狙い撃ちにされるぞ！』

被弾で動きが鈍った僚機を隊長が叱咤する。

部下達の覇気を感じる返事から、志気が下がっていないことを確認し安堵する。

『隊長、このままだと長くは持ちませんぜ』

『わかってる！各機ポイントαまで後退、ミサイル攻撃をしかける』

平静を装ってはいるものの、内心では焦りを感じていた。

（アウドムラを当てにしなければ全滅するのは間違いない、しかし間に合ってくれるのか……）

ラインを下げた彼等は再びミサイルによる攻撃をしかける。

一方、U-148はMS隊を盾にしつつアウドムラとの合流ポイントへ向かっていた。

水流ジェットエンジンを搭載した水陸両用MSは航続距離が長いため、けしてMS隊を切り捨てた訳ではない。

「艦長、アウドムラより入電。MS隊を先行させるということです、第1派合流まで5分」

「MS隊に通信、5分間現ラインを死守、必ず生きて帰還せよと伝えろ」

『総員第一戦闘配置、MS隊発進急げ！』

ハヤトの声のアウドムラの艦内に響く。U-148との合流まではまだ時間があつたが、艦内は戦闘前の緊張感にあふれていた。

『俺とバート中尉、タンデムのZプラス3機で先行する、後続はイアン大尉の指揮下に入れ』

アムロが計器のチェックを進めながら指示を飛ばす。

『アムロ大尉、タンデム機発進準備完了しました』

『こちらもいつでも出られます』

タンDEMとアルバートから最終チェックを終え、発進準備が整ったことが通信で伝えられる。

『よし、アムロ、Zプラス行きます！』

『アルバート・サックウィル、ZプラスA1、出る！』

『タンDEM・ライネス、Zプラス発進します！』

3機のZプラスA1型は発進した直後、ウェイブライダーへと変形し飛び去って行った。

『イアン・ヴァルモール、ネモ、出るぞ！』

『サミュエル・フェルナンデス、ネモ、出ます！』

『アレックス・コールマン、ネモ、出るぜ！』

『フレデリック・ブルックナー、ネモ、行きます！』

イアンのディジェに続き3機のネモがドダイ改に乗り出撃する。

Zプラス自体はアウドムラに6機が稼動状態で搭載されているのに関わらず、3機しか出撃していないのは変形を絡めた戦闘機動を実用レベルで行えるパイロットがアムロとタンDEM、アルバートの3人しかいないためだ。

『各機速力最大、最短ルートで戦域まで急行する。バディから離れるなよ』

イアンが他の3機に通信で指示を飛ばす。本来MSは3機1個小隊の場合がほとんどだが、彼らはドダイ改の不足から2機1個小隊の形を取っていた。

もともと、空軍では小隊内での技量の差がある場合2機1個小隊とするのは別段珍しい話ではなく、むしろその場合3機1個小隊にするほうが危険性が高い。

だが、Zプラスを駆るアムロ達先発隊に関して言えばそれは当てはまらなかった。

『大尉、敵MS隊をレーダーに補足』

タンデムのZプラスのレーダーが、U-148のMS隊と交戦中のティターンズ部隊を捕らえる。

『こちらでも確認した、バート、ここから狙撃する。足場を頼んだ』

『了解！』

アムロはZプラスをMS形態に変形させ、アルバートのZプラスの上に伏せビームライフルを構える。

『直撃させる！』

アムロが気合とともにトリガーを引く。その銃口から放たれた光条は1機のバーザムが乗るベースジャバーのみを正確に捉え、火球へ

と変えた。

『新型：しかもこの遠距離からの狙撃だと！』

ハインツが驚愕で語気を荒げる。ミノフスキー粒子の影響下、しかもビームが減衰しやすい海上という環境下での遠距離狙撃は熟練したMSパイロットでも困難だからだ。

しかも敵の新型は高速で移動しながらそれをやったのけた。

『隊長、水中の敵機、後退していきます』

『ASM全弾発射！』

可変機との戦闘ではデッドウェイトにしかならないと即座に判断したハインツの指示により、後退していく水中用MS4機に向かって残る3機のベースジャバーに残された4本のASMが殺到する。

その内の1本は1機のハイゴッグを捕らえ、近接信管が作動したもう1本のASMの爆発との相乗効果によりハイゴッグを文字通り海の藻屑へと変える。

『味方の反応が消えた……クッ！』

守れなかった、その思いに表情を歪めながらもアムロはアルバートのZプラスから飛び降りバレルロールと共に変形し、敵MS部隊へと突撃する。

だが、その突撃は1機のギャプランがベースジャバーとドッキングアウトしながら斬りかかって来た事で中断を余儀なくされた。

『これ以上はやらせん!』

『ちい!』

ギャプランのビームサーベルをとっさに出力したロングビームサーベルで受け止める、しかし勢いを殺しきれずアムロのZプラスは空中で後退する。

『こちらはカラバのアムロ・レイ大尉だ、現空域のティターンズ部隊に告ぐ。俺達は現在連邦軍よりティターンズ討伐の任を受けている、無駄な戦闘は避けたい、直ちに武装を解除し投降してほしい』

アムロがオープンチャンネルで無線を飛ばす、ミノフスキー粒子の影響下とはいえ近距離無線すら使えないということはない。

ましてや鰐ぜり合いをしている敵機に対してであれば聞こえないはずがなかった。

『こちらはティターンズのハインツ・ワンボルト大尉だ、貴官らの要求には従えない。我々は与えられた任務に従いジオン残党に組するゲリラ組織カラバを掃討する』

そう高らかに宣言するとともにハインツのギャプランがサーベルを振り払い、アムロのZプラスと距離をとる。

腰部ビームカノンで追撃するが、ハインツのギャプランはムーバブル・シールドバインダーの膨大な推進力によってもたらされる強烈

な旋回性能を活かし、紙一重のタイミングで回避する。

『議会は既にエウーゴとカラバを連邦軍として追認している、この戦闘は無意味だ』

『武力で制圧しておいて何を言う！』

アムロの言葉に激昂したバーザムのパイロットが、牽制のライフルを撃ちながらアムロのZプラスに斬りかかる。

『タンデム！』

アムロは最小限の動きでライフルを躲しつつバックブーストで距離を離していく。

その直後、タンデムのZプラスが間に割って入り、すれ違い様に抜刀しながらサーベルごとバーザムの腕を切り落とした。

『大尉はやらせない！』

『クッ……』

アムロはなおも投降を呼びかけるが、バーザムのパイロットはそれに答えることなく後退する。

程無くして、ギャプランのレーダーが後続のネモ隊捉える。

『後続……母艦との距離は稼いだ、各機後退しろ』

『逃がすか！』

アルバートの声にハインツはフツと不敵な笑みを浮かべ、ビームを出力したままのビームサーベルを放る。

『……ッ！全機衝撃に備えろ！』

アムロが叫ぶとほぼ同時に、ハインツのギャプランが両肩のムーバブル・シールドバインダーに装備されたメガ粒子砲でサーベルの刀身を撃ち抜く。

サーベルの刀身に直撃した高出力のメガ粒子の奔流は、サーベルを包むエフィールドに散らされ海面に降り注ぎ、広範囲で水蒸気爆発を起こした。

凄まじい水飛沫と霧に視界を塞がれるアムロ達、晴れた頃には遠方に3機の輸送機が見えるのみだった。

第4話 遭遇戦（後編）（後書き）

ハインツが撤退する際使用したのは劇場版でカミィユが見せたビームコンフューズです。

U・C・を舞台とした作品で水中でビーム兵器を使用できるような描写がされているものが多いですが、この作品内ではヒートブレード系武装ともども水蒸気爆発を起こすために使用不可とします。

第5話 ハワイ沖にて（前書き）

5000文字突破、長くなるので切ります。
安定してこのくらい書けるようになりたい・・・

第5話 ハワイ沖にて

U・C・0087、11月21日 太平洋

アウドムラがU-148と合流し、着水してから1時間がたった。

現在U-148はアウドムラの開かれた左舷サイドハッチに横付けされている。

ティターンズの対潜攻撃で致命傷こそ無かったものの、浸水区画が無かったわけではなく上部外壁だけとはいえアウドムラの乗員と協力して応急修理に当たっていた。

とはいえエウーゴと比べ人手が潤沢なカラバではそこにMSのパイロットまでもが駆り出されることは稀であり、シミュレータールームで訓練をしていたりレストスペースで軽食を取っていたりとそれぞれの時間を過ごしていた。

『フレッド、変形後の機首の位置を考えて動くんだ』

「そうは言っただって……うわっ！」

撃墜判定が出され全周モニターがブラックアウトすると共に、シミュレーターに内蔵されたバイブレーターがリニアシートを揺さぶる。

「ふう……また負けた」

軽く溜息を吐きながらメインモニターを収納し、シミュレーターの

ハッチをくぐるフレデリック。

「よう！今回も俺の勝ちだな」

既に外で待っていたアレックスがフレデリックにスポーツドリンクが入ったボトルを投げ渡した。それを受け取りストローを取り出し差し込む。

「はなっからお前に実技で勝てるとは思ってないよ」

フレデリックはボトルに口をつけながら答えた。事実、士官学校時代からフレデリックはアレックスに実技試験の順位で上回ったことが無かった。

もつとも戦術に関するレポートなど、筆記面では毎回上位10人に入るほどの好成績を維持していたためフレデリックが一方的にアレックスに劣っているわけではない。

「フレッド、気持ちで負けていては勝てるものも勝てないぞ。で、今回の反省点はなんだ」

携帯端末に今回のシミュレーションのリプレイデータを移し終えたタンDEMがフレデリックに問う。

「乱戦状態での変形動作における姿勢制御の失敗、被接近時の対応の遅れ……でしょうか？」

「分かってるな、前者は慣れるとしか言いようがないが後者は近づかれて対応できないならもつと弾幕を張れ。アレックスも近接戦に持ち込む際の被弾軽視、実戦で多用したらメカニックが泣くぞ」

タンデムが件の場面を映した携帯端末の液晶を見せる。

その画面には肩部アーマーや腰部ビームカノンを弾き飛ばされながらも、ライフルから出力したロングビームサーベルで敵機を撃墜するアレックスのZプラスが映されていた。

「うわぁ……真似する気にはなれないな」

「まあ至らない点は随時改善していけばいい、ところで何か食べに行かないか？」

「「行きます！」」

タンデムの誘いに、二人は即座に賛成の意を示すのだった。

鮮やかな一面の青い海の中に、無骨なコンクリートの色をさらす人工物が浮かぶ。

海に浮かぶ人工島、メガフロート『カナロア』である。

ハワイ神話の海神の名前を冠するこの人工島は、もともとは次世代の宇宙へのアクセス手段の座をマストライバーと争った、軌道エレベーター計画において建造された基礎部分であり計画が頓挫した段階で蜂起されていた。

その後、もともと備え付けられていた船舶の停泊施設と航空機の運用施設を活かして連邦海軍の重要拠点として新たな道を歩むことに

なる。

ジオン軍の残党狩り部隊であるティターンズにとっては移動可能な海上基地というのはガルダ級に匹敵するほどの有用性を持った基地であり、その所属はティターンズに移されていた。

その滑走路にガウ改とミデア後期型2機からなる補給船団が着陸する。

そのどれもが戦闘で傷ついた体躯をさらしていた。

ガウ改は着陸前から誘導を受けていたのか、一足先に格納庫へと機首を向けている。

『こちらミデア1番機、先にG-?を降ろしたい。誘導求む』

『こちら管制塔、了解した。第2格納庫へ向かわれたし』

『了解』

通信が切られ、連邦軍から接收されたことを示す淡い青色のミデアが空きのMSハンガーが存在する第2格納庫へ向かう。

格納庫に収容されたミデア1番機はハッチを開放し、積荷と1機のMSを降ろしていった。

カーゴブロックから降ろされたMSはG-?のコードネームで呼ばれる機体であり、ギャプランの様な頭部を持つが、正式名称をORX-013ガンダムMk-?といい、ガンダムの名を冠する機体である。

ハンガーに固定されたガンダムから昇降用リフトを使って降りてきたのは、オーガスタ系のテストパイロット用ノーマルスーツに身を包んだ小柄な兵士だった。

「すみません、ハインツ・ワンボルト大尉はどちらでしょうか？」

ガンダムMk-?のパイロットが手近なメカニックに声をかける。

フィルターのかけられたノーマルスーツのヘルメットからその素顔をうかがうことは出来ないが、女性の声であることは確かだった。

「お疲れ様です大尉。こいつがG-?……いや、ガンダムMk-?ですか」

カナロアのチーフメカニックであるクルツ・フォード曹長がハインツにドリンクの入ったボトルを渡しながら言う。

「ああ……無事に運んでこれたのは僥倖だ、他の機体と一緒に整備しておいてくれ」

「了解です、ところで……後ろのお嬢ちゃんは何なんですかい？」

クルツ曹長がハインツの肩越しに指差しながら言う。

そこには先程ガンダムMk-?から降りてきたパイロットが佇んでいた。

「ん…… ああ、オーガスタの置き土産だ。 准尉、官姓名を」

クルツ曹長に指摘されるまで気づかなかったのだろう。

流し目で後ろを確認した後、そのパイロットに自己紹介を促す。

「…… エリカ・ドーソン准尉です」

女性パイロットが敬礼しつつ名乗る。

「あ…… ああ、ここのチーフメカニックのクルツ・フォード曹長だ、よろしく」

クルツも敬礼で返すが、その口から発せられる言葉には驚きが隠せないでいた。

理由は言うまでも無いだろう、エリカの体は軍人としては華奢すぎる。

ハインツの肩ほどしかない身長と、その細い腕は軍服を身に纏っていないければ到底軍人には見えない。

「失礼だが、 准尉は何歳で？」

「19歳です」

クルツの問いにエリカは表情を微塵も変えずに答える。

「准尉、君にはこの基地カナロアにいる間は向かいのギャプランを使ってもらうことになる」

ガンダムMk-?の正面のハンガーに固定されているギャプランを顎でしゃくりながら言うハインツ、エリカは無表情のまま「はい」と小さく相槌を打つ。

「本気ですか大尉!？あの予備機は耐Gシステムが旧式で全天周モニターにも欠陥がある初期生産型ですよ、だからこそ誰も乗れる人間がいなかったのに……この嬢ちゃんを乗せるなんて正気の沙汰じゃありませんよ!」

クルツがハインツに食ってかかる。

「TR-5用のオプションパーツを2機分受領している、それを使えば問題ないだろう」

「いいえ、その必要はありませんよ」

突然会話に割って入ったのは、白衣に身を包み、いかにもマッドサイエンティストといった薄い笑みを浮かべる男だった。

「あんた……名前は」

明らかに人格者とは思えない容貌の彼に警戒感をあらわにしながらクルツが名前を問う。

「申し遅れました、オーガスタ研究所のローレン・ナカモト技術中尉です。以後お見知り置きを」

ローレンはそう言って右手を差し出す、クルツは不快感を顕^{あら}わにしながらもその手をとった。

「ドーソン准尉は高G環境下でも戦闘の続行が可能ですので、わざわざ仕様変更する必要は——」「黙れ」

ローレンの言葉をハインツがさえぎる。

「しかしながら大尉、彼女は集団戦闘を考慮」「黙れと言った」

制止を意に介さず話し続けるローレンに、ハインツはどすの利いた声で鋭く言い放つ。その言葉には明らかな不快感が含まれていた。

「中尉、今の彼女はどんな形であれ私の部下だ。自分の部下をどう使うかは私が決める」

「……わかりました。では後はお任せしますよ、ハインツ大尉殿」

そついい残し、ローレンはその場を去るのだった。

応急修理を終えたU-148とアウドムラはハワイへと進路を取っていた。

傷ついたU-148は乾ドックでの整備をする必要があり、カラバに協力的なパールハーバーベースでの整備を受けるためだ。

アウドムラはその護衛としてハワイまで同行する手筈になっている。

そんな中、ハヤトはブリッジでホンコンのルオ商会と連絡を取っていた。

通信画面に映るのはルオ・ウーミンの娘であるステファニー・ルオだ。

『ヨコスカ基地で合流予定の人員は既に現地入りしました。スケジュールの調整はこちらで行いますので、後ほど連絡させていただきます』

「わかりました、可能な限り急がせます」

『当然です、MSの追加パーツは予定通りヨコスカベースで受けとってください』

「了解です、では後ほど」

アウドムラは現状、MSの数はあるが扱えるパイロットがいないという状況だ。

キリマンジャロ基地ではもとアウドムラに配備されていた機体を含め多数のMSを戦闘空域ぎりぎりまで輸送したアウドムラだが、その半数以上が未帰還となりアウドムラの搭載機も12機あった機体が5機にまで減ってしまっていた。

「ハヤト、補充パイロットの資料を見せてくれないか？」

「ああ、印刷した奴があるから持ってきてくれ」

予備パイロット自体はそここの人数がいるため機体さえ補充することが出来れば、アウドムラの戦力は以前の水準を取り戻すことが出来るはずであった。

が、補充された機体がZプラスであったことからいまだその戦力は心もとない状況にある。

そのためにルオ商会を通じて集められた、Zプラスを操縦するために必要な戦闘機とMS両方の操縦経験を持つパイロット達と合流する予定になっていた。

アムロがハヤトから受け取った資料はそのパイロット達のものである。

「整備の手伝いをしている、何かあったら呼んでくれ」

そう言う残し、アムロは資料を読みながら扉の向こうへ去っていったのだった。

第5話 ハワイ沖にて（後書き）

ガンダムMk-Vは最低でもアクシズに流れた1機とニューデイスアイズが実戦配備した1機の計2機が作られているので試作3機が作られていたと解釈。

エリカはオーガス研究所の強化人間なので薬物投与はロザミア同様ほとんどありません。

第6話 新たな仲間

U・C・0087 11月21日 カナロア

カナロアの格納庫では、MSの整備と改修のために多くの人員が作業を進めていた。

整備は普段と同様だが、改修される2機のギャプランのもとには、使われていなかった予備機は当然として、ハインツの1番機にも普段以上の人員が集まっている。

そんな中、ハインツはギャプランのコックピットで作業の傍ら物思いに耽^{ふけ}っていた。

「ありがとう、か……」

時間はさかのぼり、一時間前に遡る。

ハインツはピークが過ぎ、人がまばらになった食堂で食事を摂っていた。

彼を慕う部下は少なくないが、食事中くらいは自分に聞かれたい話しが出来るようにとの彼なりの配慮だ。

そのことを知っている近しい部下達は自分達で早めの食事を摂るのだが、今日は二人の女性がハインツに同席しようとしていた。

「失礼します、ハインツ大尉」

「……失礼します」

ハインツのむかひに座つたのは、格納庫で話をしたエリカ・ドーソン準尉と見知らぬ女性だった。

「失礼、貴女は？」

ハインツがスプーンを動かす手を止め聞く姿勢をとる。

「失礼しました、ナナイ・ミゲル少尉相当官です。彼女のケアをしています」

「貴女がミゲル女史か、話は聞いている」

「先程はエリカがお世話になったようで、エリカ」

ナナイがエリカに視線で促す。

それに応じるようにエリカは席を立ち、ハインツの横に立った。

「あの……先程はありがとうございました……」

エリカが俯きながらハインツに礼を言う、しかしハインツには何に對して礼を言っているのかわからなかった。

「失礼、私は君に例を言われるような事をした覚えは無いのだが」

「その……ナカモト中尉に……」

エリカが細い声で囁くように言う。

「すまないが聞き取れなかった、もう一度言ってもらえるか？」

「そ、そのつ……ナカモト中尉のことで……その……」

「ああ、そのことか」

尻すばみのエリカの声はすべてを聞き取ることが出来なかったが、ハインツはナカモト中尉という言葉から何を言いたいかは察することが出来た。

「私は自分で見たことしか信じない性質^{たち}でな、君があ^の機体を操るところを見なければあのような危険なMSを実戦で使わせる気はない」

ハインツがエリカの頭にポンと手を乗せ言葉を継ぐ。

「ましてや、そんなMSを君のような子供が操るなど信じられる話ではあるまい」

「……私は子供ではありません」

エリカがふくれる。しかし幼さの残るエリカの顔では愛嬌すら感じさせてしまう表情にしかない。

「そういうところが子供だというんだ」

「……どういふことですか？」

エリカがふくれた顔のまま納得いかないといった表情で疑問を口にした。

ハインツはくしゃくしゃと彼女の髪を撫で付ける。

「それがわかるようになれば君も大人だ。カレー、冷めないうちに食べたほうがいいぞ」

「……はい」

エリカは困ったような顔に少しの笑みを浮かべながら返事をするのだった。

『こちら管制塔、アウドムラは第1滑走路へ着陸されたし』

『こちらアウドムラ、了解した』

アウドムラがフラップを最大まで伸ばし、無数のランディングギアを展開しながらヨコスカ基地の滑走路へと高度を下げていく。

やがて、軽い衝撃と共にアウドムラは後部のランディングギアを地に着けゆっくりと着陸する。

ヨコスカ基地で唯一ガルダ級を格納できる第5格納庫へ機体を収めると、アウドムラは後部ハッチを展開して静止した。

『総員半舷上陸、整備班と各パイロットはカーゴブロックで待機だ』

クルーに指示を出し終え、ふうと文字通り一息つくハヤト。

「お疲れ、ハヤト」

アムロがホットコーヒーの入った紙コップを渡しながら、ハヤトに
労いの言葉をかける。

「ありがとうアムロ、Zプラスのパーツはドダイと一緒に搬入予定
だから監督は任せるよ」

「任せておいてくれ、それよりも彼らの到着はまだかい？」

「そろそろ来るはずだ、俺達もカーゴブロックで待てばいいさ」

そう言ってハヤトは空になったカップをごみ箱に投げ入れ、アムロ
と共にブリッジの扉をくぐった。

一方カーゴブロックにはハヤトの指示の元パイロット達が集まっ
ていた。

この場に居ないパイロットはアムロだけだ。

「合流予定のパイロットの名前……なんでしたっけ」

「テッド・エマーソン大尉、ルーク・エルフィストン少尉ね、二人
ともアナハイムのテストパイロットよ」

サミュエルに金髪碧眼の女性、ベルトーチカ・イルマが答える。

彼女はカラバの作業員として活動しており、今回の補充パイロットの件に関しても一枚噛んでいるためにその名前を良く知っていたのだった。

「さすがはベルだな、それでその二人はまだか？」

エレベーターの方から歩きながらアムロが話に入る、横を歩くのはハヤトだ。

「二人はまだよ、Zプラスを運んでいるから時間がかかるんですけど」

「何型か分からないか？」

「フライングアーマーを装備したCX型だそうよ、大気圏突入の実験をかねて直接月から来たって聞いているわ」

ZプラスCX型、A1型を宇宙で運用するためにA1型を改修した試作機である。

A1型の改修機であるために、フライングアーマーとエンジンの換装で純粋なA1型としての運用も可能な機体だ。

「ということはエウーゴの人員ということか……ん、どうやら来たみたいだぞ」

アムロが後部ハッチを見やり言う、見るとZプラスを積んだ2台のMSトレーラーがアウドムラに入ってくるところだった。

空いているスペースにトレーラーが止められ、荷台が簡易ハンガー

として立てられていく。

作業が終わり2台のトレーラーから出てきたのは、連邦軍の制服を着た若い二人の士官だった。

「アムロ大尉、連邦軍予備役大尉、テッド・エマーソンであります。時間に遅れて申し訳ありません！」

「ル、ルーク・エルフィストン少尉であります！」

二人が全身をぴんと伸ばし、敬礼をしながら声を張り上げる。

「そんな堅苦しいのはやめて楽にしてくれ、MSを運んできてくれたんだろ。遅れたことをとやかく言うつもりは無い」

「ハッ！」

「いや……だから堅苦しいのはやめてくれといったんだが……」

アムロが頭をかきながら言う。階級に大きな開きがあるものの、それを越えた付き合いのあるブライトという友人がいるせいかな彼はこのような堅苦しい話し方は苦手だった。

「まあいいじゃないか……それよりこれで全員揃ったな、みんな聞いてほしいことがある」

ハヤトの言葉にその場に居た全員が注目する。

「まず本題から入らせてもらうが、アウドムラのZ^Tプラス隊は明日から1週間の実機訓練の後、18^F戦術戦闘^A対抗飛行隊として再編成

されることになる。任務はこれまでどおりアウドムラのMS隊としての役割はもちろん、可変機を用いた教導部隊としての役割を持つこととなる」

一息に要点を言うと、一旦話を切るハヤト。

「ではメンバーを発表するぞ、18TFAS隊長、アムロ・レイ大尉」

「了解した」

アムロが敬礼と共に返事を返す。

「18TFAS副隊長および第1小隊隊長、イアン・ヴァルモール大尉」

「了解」

イアンもアムロに習い、敬礼で返す。

「第2小隊隊長、テッド・エマーソン大尉」

「ハッ」

テッドがかつちりとした敬礼で返事をする。

「第1小隊パイロット、タンデム・ライネス中尉、フレデリック・ブルックナー少尉、アレクサンドロス・コールマン少尉」

「了解」

タンデムをはじめとする3人も敬礼と共に返事を返す。

「第2小队パイロット、アルバート・サックウィル中尉、サミュエル・フェルナンデス少尉、ルーク・エルフィストン少尉」

「了解」

アルバート以下3人も同様に敬礼をし返事をした。

「よし、では後ほどミーティングを行う。集合時間は2000時だ、解散！」

ハヤトの言葉でそれぞれその場を離れていく、こうして18TFA Sの物語は始まりを告げるのだった。

第6話 新たな仲間（後書き）

ちなみに18TFASのTFASはTactical Fighter Aggressor Squadronで戦術戦闘対抗飛行隊です。

アムロは遊撃機として立ち回るため小隊に属していません。

第7話 それぞれの瞳

U・C・0087、11月22日 ヨコスカ基地

5機の航空機がヨコスカの空を舞っている。

それはウェイブライダーのような形状をしたV字翼機だった、アウドムラの飛行隊がのるその機体は変形したZプラスのように見える。

だがよく見るとその機体はZプラスではない。連邦軍が開発した新型戦闘機『ワイバーン』である。

ウェイブライダー形態のZプラスに操作感覚が近いため、訓練の一环として飛行訓練を行っているのだった。

『各機、着陸体勢を取れ』

アムロが指示を飛ばしつつ、機体の高度を下げる。

後続の4機もアムロに続いて高度を下げてゆく。

やがてアムロの機体がランディングギアを展開し、フラップを最大まで伸ばしながらゆっくりと地に足をつけた。

後続の機体も1機、また1機と着陸していく。

全ての機体が着陸し、格納庫へ機体に向けた段階で飛行訓練の終了を告げる通信が入った。

「今度は実機訓練になる、しっかり身体を休めて置けよ」

そいつってアムロはベルトーチカと共にカフェテリアへ行ってしまった。

フレデリックとアレックスは何とはなしに格納庫においてあったタイヤに腰掛ける。

「休めって言ってもどうするんだかね」

「その言葉はもう聞き飽きたよ、黙ってるとは言わないけどおとなしくしてろよ？」

「へいへい」

フレデリックの忠告に手慰みにスポーツドリンクの入ったボトルを投げては掴みを繰り返していたアレックスが返事をする。

基本的に落ち着かない性格の彼に黙って休んでいるということは気が許さないようだ。

このように仲のよいフレデリックとアレックスだが、その仲を辿ると4年前までさかのぼる。

フレデリック・ブルックナーは戦災孤児だ。

ジオン公国軍のブリティッシュ作戦により地球に落着いたコロニーの破片は地球各地に甚大な被害を及ぼし、シドニーを巨大なクレイターへと変貌させた。

それによりおきた巨大津波はフレデリックの住むオーストラリア沿岸部も甚大な被害を受け、その時に彼は家族と死に別れたのだった。フレデリックにとって幸運だったのは親が自分に残してくれた口座に当分の生活には困らない程度の預金と、母の伯父が彼に好意的だったことだろう。

アデレードに住む伯父夫婦は子供がいないことも手伝ってか、フレデリックに対して本当の息子のように接してくれていた。

その伯父の家に住むようになって4年がたちフレデリックがハイスクールに通っていたときだ、コロニー落下事故の余波を避けて隣に引っ越してきたのがコールマン家だった。

当然の帰結として二人は友人となり、士官学校を卒業した今となっても親友と呼べる間柄となったのだった。

「そつえばさ、あの夢って今も見えるのか？」

アレックスが少し心配そうな表情で聞く。

「まあ……な」

フレデリックが重い口調で返事をする。

あの夢とは彼から家族を奪った日、コロニー落としての記憶だ。

思春期の彼の心にトラウマとなって刻み付けられたその記憶は8年がたった今も悪夢という形で彼をさいなみ続けていた。

「最後に見たのはZプラスが配備されたときだ……結局今だに引きずってるんだよな」

「自分だけ生き残ってしまった……ってか？」

ああ、といいながらフレデリックはスポーツドリンクに口をつける。

「過去に踏ん切りがつけられないんだよ、自分に自信が持てないんだ」

「あらあ？いつも成績優秀なフレデリック君の台詞とは思えませんかえ」

アレックスがおどけた口調で言う。

「抜かせ、実技でお前に勝った記憶なんて一度もないぞ」

「さあてどうだったかな、馬鹿な俺にはさっぱりわからん」

頭の横で握りこぶしをパツと開ながら言うアレックス。フレデリックはそれを見てくすくすと小さく笑っていた。

「やっぱお前は辛気臭い面してるより笑ってる方が似合うよ」

「そうかい？」

「ああ、それよりもそろそろ行かないと遅刻するぜ」

アレックスが時計を見て言う。フレデリックはああ、といいながら

彼と共にMSハンガーへと向かうのだった。

「今後我々第1小隊は私とエリカ準尉のロッテとカートを中心としたケツテで構成されることになる」

カナロアでは演習前の整備に追われるメカニック達による格納庫の喧騒の中、ハインツが麾下の3人にエリカを加えた4人に対して今後の方針を伝えていた。

ロッテとは2機を1個小隊とする編隊戦術であり、ロッテは2機を1個小隊とする編隊戦術である。

「つまり実質2個小隊になるってことですね」

「そうだ」

ギャプランとは可変MAであり、膨大な推進力を持つ。

それ故にサブ^Sフ^Fライト^Sシステムを使用したMSと小隊を組む場合、どうしても突出しがちになる。

1機だけであればその1機を隊長機とすることでその問題は小さくなるが、2機の場合はそうも行かない。

故にハインツは自分の小隊をロッテとケツテに分割したのだ。

「指揮はどちらも私がとるが、ケツテ2つに分割出来ない以上勝手は違って来るだろう。今日の演習は、新たな編成を想定した実戦形

式の演習となる。何か質問は？」

周りを見回し、挙手がないことを確認する。
まわ

「よし、整備が完了次第演習に移る。解散！」

解散を命じられ、それぞれの搭乗機へと去っていく第1小隊の面々だが、エリカだけはその場に留まっていた。

「どうした、エリカ準尉」

「いえ……その……」

俯きがちに口ごもるエリカ。

「言いたい事があるなら口に出すといい」

ハインツの言葉に応じるように、エリカはおずおずと口を開く。

「以前大尉が私の搭乗機を仕様変更するように指示したのは……このためですか？」

「結論から言えばその通りだ、君がカナロアに來ると決まった時から考えていたことだ」

「そう、ですか……」

エリカはハインツという男がどういう人間かわからなくなっていた。

食堂で優しく自分を気遣ってくれたのも、今の軍人としてドライな

言動をとるのもハインツだ。

エリカにはどちらもハインツが自分を偽っていないという確信がある。

故にどちらが本当のハインツなのかわからないのだ。

その場その場で切り替えるのは当然の事だが、彼女にはそのことを理解するための場数が圧倒的に足りていなかった。

「……そんな顔をするな、演習が終わったらまた一緒に食事をしよう」

彼女の複雑な表情を見たハインツが苦笑しながらエリカを食事に誘う。

それを聞いたエリカは、うれしそうにはいと頷くのだった。

極東地域に位置するラサ基地の格納庫では、一人の男がMSのコクピットに籠りシミュレーションを繰り返していた。

内容は狙撃任務、ラサ基地の上空から侵攻するMSを迎撃するといった内容である。

エウーゴのラサ侵攻作戦を想定した物だが、彼がこなしているものは狙撃手用に内容を調整されたものだった。

彼は淡々とメインモニターに移る敵機に照準レティクルを重ね、ト

リガーを引いていく。

それに連動するように、全天候モニターに映る仮想の敵機が仮想のメガ粒子弾に貫かれ爆散する。

「……………」

彼の働きが戦局に与える影響は決して大きくない。

だが、その銃口は確実に敵を捕らえその数を減らしていた。

ただひたすらにトリガーを引き続け、ジャンクの山を築いていく。

だが、彼のシミュレーションはいつまで経っても終わらなかった。

なぜなら、このシミュレーションには終わりが設定されていないからだ。

通常要塞戦においては、攻撃側は防御側の3倍の戦力が必要であると言われている。

当然、防御側は自軍の3倍の戦力を相手取ることになり、その状況で防御側のパイロットを襲う疲労は苛烈を極める。

一年戦争でのア・バオア・クー戦において、ジオンのパイロットは補給にかかるわずかな時間でさえ睡眠にあてたという逸話が残っているほどだ。

故に自分の限界を知るためのこのシミュレーションである。

その鷹の目は来るべきXデーを見据えていた。

第7話 それぞれの瞳（後書き）

誤字があれば報告願います。

第8話 ヨコスカ

U・C・0087、11月25日 ヨコスカ基地食堂

「うゝ、腹減った。エレン、俺の分取ってきてくれよ」

「お断りします、自分の分は自分でとって来るべきですよ」

エレンにきつぱりと断られたアレックスがフレデリックに思わせぶ
りな視線を投げかける。

「はいはい、後でドリンク奢れよ？」

フレデリックは仕方ないなという様子で返事をし、エレンと共に力
ウンターの列に並んだ。

その間にアレックスは3人分の席を確保する。

「はあゝ、疲れた……」

そう言つて机に突つ伏すアレックス。訓練での疲労がたまっている
のだ。

ベルトーチカが組んだ訓練スケジュール自体はそこまでハードな物
ではない。

それでもアレックスがここまで疲弊しているのはそれだけ訓練の密
度が濃いことを示していた。

1週間でZプラスの扱いを実戦レベルに至らせなければならぬのだから当然ではある。

「今日は模擬戦ばかりだったから、こんなに疲れたのは」

アレックスが机に左の頬を押し付けながらぼやく。

「ああ……冷たくて気持ちいい」

そうやってぼうつとしているうちにアレックスはまどろんでいた。

「アレックス少尉、起きてください」

「おい、おきろー」

夕食の乗ったトレーを持ってきたフレデリックとエレンがアレックスを起こしにかかる。

しかし、アレックスはなかなか起きない。

「仕方ないな……おいアレックス、寝てるなら俺がお前の分まで食っちゃうぞ」

「ん……それはだめだ」

フレデリックの言葉でアレックスはむくりと体を起こす。

「アレックス少尉……餌付けされた小動物みたいですね」

「言ってるやるな、昔からこんなものだから」

フレデリックが苦笑交じりにエレンに言う。

「どうせ俺はこんな奴ですよーだ」

アレックスが口を尖らすが、空腹のためかいつもの覇気がない。

「食事の前って日本人はなんて言うんだっけ？」

フレデリックが今となっては珍しい生粋の日本人であるエレンに聞く。

「いただきます、ですよ。手を合わせてお辞儀しながらするんです」

「そうか、んじゃいただきます」

若干イントネーションが違っていたが、合掌しつつエレンが食前の挨拶をするフレデリック。

「いただきます」

それにエレンが続く。

だがアレックスは何も言わず箸を手に取り食べ始めようとする。

が、横の二人からの視線に気づき箸をおく。

「な、なんでしょうか？」

しかし二人は相変わらずのジト目でアレックスを見やる。

「わかってるんだろ、アレックス」

「郷に入っては郷に従えですよ、アレックス少尉」

二人がじーっとアレックスを見つめる。

「……イタダキマス」

その気迫に押されたアレックスが折れ、3人は食事を始めた。

「なんか嬉しそうだな、エレン」

フレデリックが味噌汁をすすりながら言う。

「だって和食ですよ？久しぶりの母国料理が嬉しくないわけじゃないですか」

口元を掌で隠しながら言うエレン。咀嚼しながらの会話はマナー違反だが、それでも反応したのはそれ程喜んでいるということだろう。

「まあアウドムラだとどうしても調理に手間がかからないメニューになりがちだからな」

とアレックス、実際ダカールでのクワトロ大尉の演説以前は限られた補給物資のなかでやりくりしなければならなかったため、保存の利くパスタやレトルト食品などを使ったメニューが多かった。

今は連邦軍の支援があるため物資に関しては余裕があるものの、調理が簡単なメニューになりがちだという傾向は変わっていない。

「明日も朝から模擬戦か、正直先が思いやられるよ」

「けど悔しくないか？相手がアムロ大尉だったとはいえ1発目はほとんど何も出来ずに撃墜されたんだぜ？」

「まあね、ただ本気で勝つ気ならとっとと寝たほうがいいんじゃないのか？」

煮物をつまみながらいうフレデリック。

「そうだな、けどその前におかわりだ」

そう言っアレックスは茶碗を持ってカウンターへ向かうのだった。

アレックスのZプラスが前方を飛ぶ。

アレックスが前衛、俺が後衛と士官学校時代からのお決まりの配置だ。

その横にイアン大尉とタンデム中尉のZプラスがつく。

「状況開始まで15秒、各機セーフティを解除しろ」

イアン大尉からの指示で各種装備の安全装置を解除する。

今回の状況は第1小隊との模擬戦だ、ここ数日はこれに加えアムロ大尉を相手にバディ単位での模擬戦を繰り返していた。

正直アムロ大尉には勝てる気がしないが、撃墜されるまでの時間は確実に伸びている。

訓練の成果は確実に出ていると考えていいだろう。

カウントがゼロになり模擬戦が開始される。

先頭を切って接近して来るのはアルバート中尉のZプラスだ、一気に接近戦に持ち込むつもりらしい。

僚機のテッド大尉達もそのことをわかっているのか、援護射撃でこちらの進攻ルートを制限していく。

『各機散開、アルバート中尉に抜かせるな』

イアン大尉から指示が入る。

MS戦において敵に挟撃されることは、片方の戦力が1機であったとしても避けるべきだ。

故に後方へ抜かれることは避けなければならない。

アルバート中尉の機体がアレックスのZプラスに接近し、すれ違い様に居合抜き的要領で切り掛かる。

撃墜される、そう思ったがアレックスのZプラスはバックブーストでその斬撃をかわし、ビームサーベルを出力してモニターに合成されているだけだが一切り掛かる。

そのままアレックスはビームサーベルを切り払ってアルバート機の右腕に被弾判定を作り、バルカンで弾幕を張って距離をとろうとする。

そこにビームライフルを―今は照準用レーザーだが―を放ち、アレックスの後退を援護する。

もちろん回避運動を続けながらだ、模擬戦で死ぬことはないが動きを止めればすぐさま撃墜されるだろう。

『上空から敵機、来ます』

ルーク少尉の声に上を見遣ると、テッド大尉のZプラスが上空から自由落下で接近してきていた。

テッド機が太陽を背にしたことでメインモニターが一瞬ホワイトアウトする。

その一瞬でビームライフルを持つ右腕に被弾判定を受ける。

気づいたときにはテッド大尉のZプラスは自機後方へ去っていた。

幸いZプラスの射撃武装はビームカノンが残されている、まだ戦闘続行は可能だ。

『俺が仕掛ける、各機援護しろ』

イアン大尉のZプラスが突撃する。

俺は変形してビームカノンでアルバート中尉を牽制する。WR形態の方が射角が広いため、こちらの方が狙いやすい。

「フレッド、ケツだ！」

アレックスの声が響く、直後ロックオンアラートが赤く点滅した。

ウイングバインダーに被弾判定をもらいながらも機体をMS形態に戻し、速度を一気に殺して後ろを取り返しビームカノンで反撃する。

ビームライフルから放たれた照準用レーザーはサミュエル少尉のZプラスの胴体部分に直撃し、撃墜判定を出す。

「助かった、アレックス」

アラートを見てからでは確実に撃墜されていたタイミングだった。後で何か奢ってやらなければと今の状況と関係のない思考が頭をよぎるが、すぐに頭を切り替える。

『フレデリックは俺に続け、アレックスとタンデムは援護しろ』

イアン大尉が自機をWR形態に変形させ、敵陣に切り込む。

インファイトは苦手だが、この状況では俺に突っ込めと言うのは当然だ。

残された2人が1機ずつ引き付けて置く必要がある以上、その役を引き受ける機体は万全であることが望ましい。

ライフルが使用できない以上俺に突撃を指示したイアン大尉の判断

は正しいだろう。

スラスターを噴かしてイアン大尉に続く。

テッド大尉の機体にイアン大尉のZプラスがすれ違い様に切りかかるが、その斬撃はバックブーストでかわされる。

だがそんなことは問題ない、もとよりイアン大尉の攻撃はブラフだ。既に俺のZプラスもインファイトの距離にいる、アフターバーナーを噴かしてさらに距離をつめる。

『フレデリック！』

「はあああ——！！！」

気合と共に左手でビームサーベルを抜刀しつつ逆袈裟に切り上げ、その体勢のまま後ろ蹴りをくらわす。

両の脚部に被弾判定を受け、落下していくテッド大尉の機体はタンDEM中尉がコクピットを狙撃したことで撃墜判定を食らう。

その時点で模擬戦の終了を知らせる通信が入った、小隊の半数が撃墜された時点で終了するというルールなのだ。

そうして彼らは朝のヨコスカ基地に帰還するのだった。

第8話 ヨコスカ（後書き）

サブタイは適当ですw

第9話 ラサへ

U・C・0087、11月29日 ヨコスカ基地

「これをもつて全ての訓練を終了する。全員アウドムラ発進までしつかり身体を休めるように、解散！」

アムロが連日の訓練が終了したことを宣言し、パイロットたちはそれを聞くとそれぞれ散っていった。

フレデリックは自分が乗るZプラスの整備を手伝いに行く。

今急いでやる必要がある訳ではないが、シミュレーションをやるついでに整備も手伝おうという算段なのである。

消耗部品の調整、または取り替えが終わるまではOSの調整や識別コード表の更新など簡単な作業しかすることがない。

それにこの機体は最新鋭機だ、識別コード表は最新であるしOSも自分にあわせての調整はこの1週間ではほぼ終わっているため、シミュレーションに割く時間はたっぷりあった。

1週間の訓練で蓄積された戦闘データから作成されたシミュレーションを実行する。

全天周モニターにヨコスカ基地上空の風景が投影され、シミュレーションが開始された。

黙々とシミュレーションに没頭するフレデリック、コクピット内に

は合成音と操縦桿を動かす音のみが彼の耳朵を打ち続ける。

「……………」

フレデリックは無言でトリガーを引く、その視線はモニター上で動きつつける1点に注がれていた。

紅白のツートンカラーに彩られたZプラスA1型、まるで舞つかのような滑らかな動きはフレデリックに捕らえられることを拒み続けながらも、時折恐ろしくなるほどの正確さで攻撃を行う。

行動に支障をきたすレベルの損傷はないが、コンソールに表示された機体コンディションは至るところに赤いマークが点灯していた。それでも均衡を保ち続けていだけで僥倖といえるだろう。

なぜならこのシミュレーターの仮想敵はアムロの戦闘データなのだが、コンピュータにより再現されたその動きは本物に比べれば1段も2段も劣るものだが、それでもフレデリックがぎりぎり相手を出来る程度のレベルだった。

回避機動を優先して動き続けるフレデリックだが、唐突に仕掛けられた接近戦でビームライフルもろとも右腕を切り落とされる。

そこからは一方的だった、体制を整える間もなくビームカノンで左脚部と右のサイドアーマーを打ち抜かれ、バルカンでメインカメラを潰される。

ビームサーベルを抜き放ち反撃を試みるが、その斬撃を回避した次の瞬間にはコクピットにビームサーベルを突きたてられていた。

全天周モニターが一瞬ブラックアウトし、再びアウドムラのカーゴブロックを映し出していく。

モニター回復し、初めてフレデリックの視界に入ってきたのはエレンの顔だった。恐らく頭部のメインカメラを拭いていたのだろう。

『フレッド少尉、間接のパーツ交換したんでチェックお願いします』

「はいよ」

短く返事をし、ひとつひとつコンピュータに交換したパーツが認識されていることを確認する。

「問題ない、そろそろ上がるから一緒にどうだい？」

『待つて下さい、今降ります』

昇降用リフトにエレンが降りたのを確認してからコクピットハッチを開ける。

「お疲れ様です少尉」

エレンがフレデリックにスポーツドリンクの入ったボトルを手渡す。

フレデリックはありがとと返事をして手渡されたボトルを開けるのだった。

ラサは一面の曇り空に覆われていた。

そんな中、ベースジャバーに乗った2機のバーザムが付近の哨戒のために飛行していた。

「デプン1よりラサコントロール、エリアS4異常なし」

そのうちの1機のバーザムを駆るレナルドが、基地の管制室に通信を入れる。

「……とは言え、偵察機の1機でも飛んでいておかしくないのだがな」

レナルドが周囲に目を凝らしながら呟く、実際カラバの偵察機を発見したという報告は1回や2回ではなかった。

『エリアS5、若干ミノフスキー粒子濃度が高いが異常無し』

部下の官制室への通信が耳朵を打つ、ミノフスキー粒子濃度が高いことに違和感を感じつつもシート裏のバスケットからドリンク・チューブを取り出し口をつける。

長年戦場にいた兵士の勘とでも言うのだろうか、こういうときに感じる違和感がその身を助けた事も少なくないレナルドにとっては根拠のないことと切って捨てる気にはなれなかった。

「上空の警戒を密にしろ、なにかいるかもしれん」

部下に指示を飛ばし哨戒を再開する。しかしこの天気の中敵の偵察機を見つけることは難しいだろう。

それを承知しつつも、万が一のことを考えれば警戒するように指示出すはかなかった。

ぴりぴりとした雰囲気の中、重苦しい空気が辺りを支配する。

『エリアS5異常な……いや、これは……大尉！』

警戒をしると言ったものの、何も見つからずにいたずらに時間が過ぎていたことでレナルドが半ば諦めかけていた矢先に部下が何かを見つけたのか声を張り上げる。

『3時方向になにか見えます、恐らく航空機です』

部下が言う方向を見遣ると、雲の切れ目に確かに航空機らしき影が移動しているのが見えた。

「このエリアを飛行する友軍がないか照会しろ、早く！」

『あ……ありません』

識別信号を出さずに飛行する未確認機が基地上空を無断で飛行している、

それはレナルドに攻撃を決意させる理由としては十分だった。

「……やってみるか」

レナルドがぼそりと呟き、ベースジャバーを着陸させた。

『大尉、まさかあれを狙うつもりですか！？』

「そのまさかだ、観測データよこせ」

驚く部下をよそに、腰にマウントしていたビームスナイパーライフルを片手にバーザムを狙撃体制に移行させる。

『測距データ送ります』

部下の機体から送られて来る観測データを照合し、敵機により正確な移動速度と自機との距離を推測しつつ照準を動かす。

雲に入られてしまったが、その雲も大して大きくなかったため気にせず1射目を放つ。

その狙撃を嘲笑うかのように再び視界に現れる未確認機だが、レナルドは後退しようとするその機体を冷静に撃ち抜いた。

動く航空機ですら撃ち落とす、それがこの男レナルド・ベーレンスの実力であった。

アウドムラはタクラマカン砂漠の上空を旋回していた。

ラサ基地攻略作戦が近いというのにアウドムラがこうして砂漠に立ち寄ったのはある兵器のテストのためであった。

『タンDEM機、出ます』

「イアンだ、出るぞ」

2機のZプラスが砂漠へと降下する、その内1機の頭部には大きな砲口が装備されていた。

ZプラスA2型、ZZガンダムに装備されているハイメガキャノンの簡易型が装備されているのだ。

ハイメガキャノンはカタログスペック上でもMSを容易に破壊できる威力を持つため、下手な射爆場でテストをするわけにはいかない、そのためにアウドムラはタクラマカン砂漠に立ち寄ったのだった。

この付近では一年戦争時に大規模な戦闘があつたのか、複数の陸上戦艦や航空空母の残骸が放置されており、射撃テストのターゲットには困らない。

「ターゲットは8時方向500m先のガウの残骸だ、外すなよ」

『了解、ハイメガキャノンチャージ開始』

タンデムのZプラスがビームライフルを背部にマウントし、膝立ちになる。

簡易型とは言えハイメガキャノンだ、オリジナル同様射撃時前後は他のビーム兵器は一切使えず、ビームライフルのように連射することも叶わない。

唯一射撃後にパワーダウンしない点は勝っているが、威力も相応に落とされている。

『80、90、96、100……ハイメガキャノン発射!』

タンデムのA2型からハイメガキャノンの太いビームが放たれる。

そのビームの奔流はガウの胴体を容易く貫通し、砲口であるタンデム機の首が振られることで薙ぎ払われたビームはガウの胴体を半ばから断ち切った。

「照射時間1.5秒、破壊力は想定より少々下がるか」

横で観測していたイアンがコンソールを叩きながら言う。

『大気圏内ですからね……次は何処ですか?』

「10時方向1000m先のヘビー・フォーク級」

『了解、チャージ開始します』

タンデム機が再び射撃体勢を取り、ハイメガキャノンのチャージを開始する。

ZZガンダムと異なり、次弾発射までのスパンが短いのがこのブラスA2型に搭載された簡易型ハイメガキャノンの利点だ。

『96、100、ハイメガキャノン発射』

タンデム機から再び太いビームが発射され、薙ぎ払われることでヘビー・フォーク級はホバー部分の半分を失いその構造を崩壊させていく。

「簡易型とはいえ凄まじい威力って事には変わりねえな…アウドムラ、テスト完了だ、帰還する」

2機のZプラスがスラスターを噴かしつつ跳躍し、アウドムラの後部ハッチから侵入する。

砂塵地獄にさらされたZプラスはいたる所に砂埃がこびりついていった。

2機のZプラスがハンガーに固定されると共にアウドムラの熱核ジェットエンジンがうなりを上げ、その出力を上昇させていく。

そして、橙色の巨鳥^{ガルダ}は夕暮れの空へと去っていくのだった。

第9話 ラサヘ（後書き）

誤字脱字があれば報告願います。

第10話 ラサの旋風（前編）

U・C・0087、11月30日 ネパール上空

ラサ基地とは戦後ジオン残党軍に睨みを利かすために建造された連邦軍の重要拠点である。

旧ラサ市の南西側から斜面にかけてに建てられた基地施設は、四方を山に囲まれたラサの地形も相まって天然の要塞となっており、独自のMS開発設備こそ持たないものの、現在はティターズの拠点として機能している。

その周辺には現在、この基地を攻略すべくカラバを中心とした部隊が集結を始めていた。

当然カラバの中核部隊であるアウドムラもこの作戦に参加すべく、途中で合流したキルギスタンのカラバの部隊と共にラサ基地へと進路をとっていた。

戦闘を目前に控えたその格納庫にはさながら戦場の様な騒がしさがあった。

「馬鹿野郎、下腕部は流体パルスだと言ったろうが！Zはジムじゃないんだぞ！」

「はっ、はい！」

アウドムラのチーフメカニックであるセルジ曹長の怒号がエレンに向けられる。

本来整備作業を手伝うことはあまりないエレンだが、現在アウドムラには合流したキルギスタンのカラバ部隊のMSも搭載されているため、整備のための人手が不足していた。

そのためにエレンは慣れないながらも整備作業を手伝っていたのだった。

しかしセルジからしてみれば慣れているか慣れていないかなど瑣末な問題でしかなく、要求された仕事が出来ない者には容赦なくその怒号がぶつけられていた。

合流した部隊のメカニックとうまく連携をとることが出来ているのは彼の努力の賜物だろう。

「曹長、BN型のシミュレーションがやりたいんだが使える機体はあるか？」

「2番機から5番機のコクピット周りは完了しています、どれでも借りて使ってください」

セルジが作業を続けながらZプラスのパイロット、テッド・エマーソン大尉に答える。

彼は今回の作戦で爆撃仕様のBN型のパイロットを務めることになっていた。

BN型とは対地、対艦攻撃用の武装バリエーションであり、大型の安定翼が設置されたテールスタビライザーとウイングバインダーを装備し、変形用サブユニットはセンサー類が対地対艦攻撃用のもの

に変更され、熱核ファンジェットエンジン2機が増設されているものを装備したA1型の派生機だ。

あくまで試作の域を出ない機体だが、今回のラサ攻略戦において実戦データを収集するために4機分のパーツがアウドムラに配備され第2小隊のZプラスがB N型へと換装されていた。

テッドはその第2小隊の隊長だ、色々と確認しておきたいことがあるのだろう。

近くにいたイアンを捕まえ、機体を借りる算段を整える。

「しかしテッド大尉、ブリーフィングまで余り時間はないぞ。大丈夫なのか？」

「なに、時間までには戻りますよ」

そういつてテッドは昇降用リフトでZプラスのコクピットへ上がっていくのだった。

「これより作戦内容を伝える」

ブリーフィングルームにアムロの声が響く。

作戦前の緊迫した雰囲気包まれたブリーフィングルームには普段アウドムラにいるメンバー以外の人員がいるため、いつもよりも引き締まっているような印象を受ける。

「ラサ基地は山肌を利用して建てられた天然の要害だ、当然その対

空砲火も激しいと予想される」

アムロがディスプレイの地図を指しながら言う。

「そこで我々は航空兵力による対空砲の無力化をはかり、その後MS隊とZプラス各機を基地へ降下させ、エリアW5のヘリポートを制圧し突入部隊の降下ポイントを確認する。対空砲の破壊目標は九割だが七割も無力化できれば作戦の続行は可能だろう」

「我々は現在地点からこのまま進攻し、エリアS6のポイントβにバグドグラ第2MS中隊と共に挟撃をしかける形になる」

ハヤトが補足し、いったん説明を切った。

要は爆撃で敵基地を丸裸にした後にMSで地上施設の一角を制圧し、歩兵部隊を基地内部に突入させ司令部を押さえるという作戦だ。

要塞戦のセオリーに乗った単純明快な作戦であるが、このような正攻法が取れる規模の戦力を投入しているということである。

アウドムラに搭載されていたパイロットのいなかったネモ数機も、合流したカラバ部隊がパイロットを担当することで実戦投入の準備が整っていた。

「18TFAS第1小隊はA2型、第2小隊はBN型の実戦テストも兼ねている、なるべく良いデータを取れるようにとの技術屋からの連絡だ」

「時間合わせは済んだな？では各員の奮闘を期待する」

こうしてカラバのラサ基地攻略作戦はしずかにその胎動をはじめたのだった。

ラサ基地の上空は大量の黒い物体が空を覆い尽くさんばかりに移動していた。

天候が変わりやすい高山地帯であるラサでは一面の曇り空は珍しい話ではないが、今ラサの上空に飛来する物体は雨雲ではなく人工物であり、それはドダイ改やベースジャバーに乗ったカラバのMS群であった。

大量の航空兵力から放たれた空対地ミサイル^{AGM}がまるで雨のようにラサ基地へと降り注ぐ。

対空砲火で数を減らされてもなお余りある大量のAGMは確実にラサ基地の機能を奪っていた。

『敵MS部隊接近、MS隊は直ちに迎撃に当たれ』

『エリアE12のカタパルトは使用不能、第203小隊はエレベーターを使用されたし』

基地内に警報や被害を伝える通信が響く、そんな中レナルドは旧ラサ市に繋がる平野にある滑走路へと出るため、エレベーターにビームスナイパーライフルを装備した自分のバーザムを乗せ地上へと向かっていった。

決して早いとは言えないエレベーターだが、レナルドには不思議と

遅く感じることはなかった。

どちらにしろ彼の本分はスナイパーだ、派手な白兵戦とは一戦を画する狙撃兵の戦いは、数秒の差で撃墜数が大きく変わることなどありえない。

スナイパーに求められるのは常に冷静でいることだ、もちろん戦闘を行うパイロットにも冷静さは必要不可欠だが、大胆さを兼ね備えたその冷静さはまた別のものだろう。

エレベーターが地上に到達し、レナルドは素早くバーザムに狙撃体制を取らせた。

刹那、レナルドの思考が切り替わる。

心は山のように静かに、氷のように冷たく

照準には寸分の狂いもなく

されどそこに感情などない、なぜなら彼は狙撃のための機械だから

だからこそ彼は――

「俺は、ただ狙い撃つだけだ――！」

戦場に一条の閃光が走った。

突然、爆撃に参加していたドダイ改からの通信が途絶えた。

ミノフスキー粒子濃度は戦闘濃度まで高まっているとはいえ天候は晴れ、至近距離での電波通信が阻害されるはずがない。

『おい、どうした、応答しろ！』

コントロールを失い失速していく僚機に呼びかけるが、その間に彼の傍らを飛行していたジムEEとの通信が途絶え失速を始める。

僚機のコクピット部分をズームし、彼がそのコクピットのみが正確に撃ち抜かれている事を理解したのと意識が蒸発したのはほぼ同時だった。

『こちらホワイトユニコーン、各機散開しろ！止まっていたら撃たれるぞ！』

ホワイトユニコーンのコードネームを与えられた青と白で彩られたZプラスを駆るアムロが、周囲の機体に注意を促すと共にランダム軌道を描き始める。

それに習うように他の機体も回避運動を交えながら爆撃のためにMSの代わりにコンテナを搭載したドダイ改を援護する、彼らの機体のセンサーが敵のアッシマーを中心とした迎撃部隊を捕らえていたからだ。

アッシマーの編隊を攻撃するため突出するアムロ、しかし背筋を走る悪寒に機体をひねった瞬間、アッシマーを掠めるように飛来したビームに行く手をさえぎられた。

『なんて腕だ、あれは確実に当たってたぞ』

敵の正確無比な狙撃に戦慄するアムロだったが、意識はその狙撃ポイントを探すことに向けられていた。

狙撃で最も重要なのは狙撃ポイントだ、直線を描く弾丸は敵を正確に射線軸上に捉えなければ敵を掠めることすら出来ない。

そして一流のスナイパーは自分の位置を悟られないために戦場では常に移動し続ける、そこでアムロは次の狙撃ポイントを予測することとで先手を打とうと考えたのだ。

しかし、狙撃はぱったりと止まり次の射撃は何時までたっても行わない。

アムロがしてやられたと思った時には敵の増援部隊が接近してきていた。

第10話 ラサの旋風（前編）（後書き）

お気に入りユーザー登録させていただいている後藤正人先生がこの作品をお気に入りに加えてらっしゃるのを発見してモチベが上がってます。

後藤正人先生をはじめとしたお気に入り登録していただいた方々と全ての閲覧者に感謝を。

誤字脱字等あれば報告願います。

第11話 ラサの旋風（後編）

『予想が外れた？……くっ、ボマー第一波後退急げ！』

アムロが1機のアッシマーをサーベルですれ違いざまに両断しつつ友軍に指示を飛ばす、しかしその間にも味方の被害は拡大しつつあった。

『ド、ドダイが……うあああ！！！！』

敵のアッシマーの攻撃でドダイ改を失ったジムIIが落下していく。体勢を崩したままなすべのないその機体は、生きている対空砲の集中砲火を浴び爆散していった。

ラサ基地の対空砲は爆撃で数こそ減らされていたが、それは空中を飛ぶMSの驚異となりえるメガ粒子砲を搭載したトーチカが主な標的だった。

突入の基点となるエリア5を制圧さえすれば制空権を維持しつつ突入部隊が基地を制圧するのを待てばいい、そのため降下ポイントから離れたこの場所では徹底的な爆撃はされていないことから、無抵抗の降下物を撃ち落とせる程度には対空機銃が健在だった。

要塞の対空砲ともなればガンダリウム合金製であろうとも上空からの加速度が加わっていれば無事ではすまない、ましてやチタン合金系装甲で覆われているジムIIではひとたまりもない。

無事に着地出来たとしても迎撃部隊のアッシマーやバーザムに狙い撃たれるのが関の山であったであろうが、結果が変わらないという

点で今は関係のない話である。

『ボマー第二派は目標ポイントへ直進しろ、各機進攻ルートを確保するんだ……くう！』

基地から接近したバーザムが放ったビームの火線をギリギリのところで回避する、苦し紛れに放ったビームライフルの光条は敵部隊が螺旋を描くように散開したことで空を切った。

3機の僚機を引き連れそのバーザムがアムロのZプラスの後方に抜けていく、その内の1機からアムロは思惟を感じなかった。

「あの機体、さっきのスナイパーか！」

強化人間のような人工的なものではなく、ニュータイプのような強いものでもなくただ無機質。

さっきの狙撃から感じたプレッシャーとあわせてアムロは今現れたバーザム隊の隊長機が先程のスナイパーだと確信した。

「それにあの隊、やるっ」

螺旋軌道を描くためには各パイロットの息が完全に合わなければならぬ。

速度、進攻方向全てを合わせることはじめて成立するその軌道は敵が極めて高い錬度と連携精度を持ち合わせていることを示していた。

アムロが指示を飛ばしつつ、ZプラスをMS形態に変形させること

でエアブレーキを利用し、ベースジャバーに乗ったハイザックの背後を取りビームライフルで撃ち落とす。

可変MSのドッグファイト性能は決して高くはないが、このエアブレーキによる急制動とAMBACによる素早い方向転換によって空中戦における絶対的優位を獲得していた。

しかしそれは1対1の場合である、次々と迎撃部隊を撃墜していくアムロに危機感を感じたのかいつの間にか先程のバーザム4機がアムロを囲うように飛行していた。

『そのパイロット、アムロ・レイだな？』

『それがどうした……くッ！』

アムロは急にオープンチャンネルで開かれた回線に思わず反応してしまう、アムロがわずかに見せたその隙を付いて四方から放たれたライフルを紙一重で回避するが、本命はそれではなかった。

レナルドのバーザムがWR形態のアムロ機に後ろから組み付き、トリモチランチャーを放つ。

『これで変形できまい……俺は貴方を撃ちたくない、アムロ大尉、今すぐ投降してくれ』

『誰がッ！』

『そうか……なら仕方ない』

バーザムがビームサーベルを構える。

アムロは死を覚悟し、目をつむった。

『イーグルチーム各機、雑魚には構わずアッシマーを狙え！』

イアンが苛立ちをあらわにしながら叫ぶ、イーグルのコールサインを与えられた第1小隊とアムロの活躍で戦線こそ支えられていたがなかなかその数を減らすことが出来ないでいるためだ。

この基地にはMS1個大隊、すなわち4個小隊からなる中隊が4隊配備されている。

現在連邦軍の地上部隊のMS1個小隊はそのほとんどがMS4機で構成されているため、単純計算でラサ基地に配備されてるMSの数は64機となる。

基地内部に陣取っている隊もあるであろうし、2方向から侵攻していることもあって実際に相手にしているのは24機程度である。

他の攻撃部隊の天敵となりえるアッシマーの注意こそ引けているが、こちらの戦力も損耗が拡大しつつあった。

『フレッド、フォーメーションDだ』

『了解』

アレックスのZプラスの動きをトレースするようにフレデリックのZプラスが後ろにぴったりと付く。

『くらえ！』

アレックスがバルカンを撃ちながらサーベルを引き抜きアッシマーにむけて振り抜く。

だがその斬撃はアッシマーに届くことはなかった、見るとZプラスの右腕をアッシマーが掴んでいる。

『こいつ……！』

アレックスは振りほどこうと目茶苦茶に操縦桿を動かすが、大型MSのアッシマー相手にパワー勝負をするにはZプラスは力不足だった。

だが、すぐ後ろに付いていたフレデリックが擦れ違いざまにビームライフルで腕部を破壊したことで自由を得たアレックスのZプラスは、即座に腰のビームカノンでアッシマーを破壊する。

『フレッド、助かった……うおっ』

ベースジャバーから飛び掛かったハイザックがアレックスのZプラスにヒートホークで切り掛かる、アレックスはスラスターで無理やり姿勢を変えてすんでのところでそれを回避した。

そしてそのハイザックはベースジャバーと合流しようとしたところを、タンデムのZプラスA2型が放ったビームライフルの光条に貫かれ爆散する。

『アレックス、気を抜くな』

『すみません、中尉』

牽制にビームライフルを放ちながらアレックスはタンデムに礼を言う。

『フレッド、8時の方向にハイザック2機だ!』

『くっ!』

腕を振る反動を利用して後ろを振り返り、そのままビームライフルを甘い狙いのまま2機のハイザックにむけて数射する。

当たることはなかったが敵は散開したため牽制射撃としては効果があったと見るべきだろう。

『だっしやああああ!!!』

散開した2機のハイザックの内1機は上空から飛来したイアンの上ブラスによりベースジャバーごと右腕を切断され、落下していったところを付近のジムIII2機からの集中砲火を浴び撃墜された。

だがその2機のジムIIIも後方から飛来したアッシマーに大型ビームライフルで撃ち抜かれ火球に変わる。

東側から侵攻するアウドムラを主力とした部隊に限って言えば既に損耗率は3割を越えていた。

『くそッ! 雑魚は減ってもハンバーガーは減らねえか』

イアンがなかなか数を減らさないアッシマーに毒づく、ハンバーガ

ーとはアッシマーのMA形態を揶揄したのだろうか、確かに円盤状のMA形態はハンバーガーに見えなくともない。

だがサブ・フライト・システムを使用したMSを遥かに凌駕する機動性を持つアッシマーの危険性はハンバーガーとは比較にならないかった。

『アムロ大尉は……くっ、しかたがない、ハイメガキャノンを使う！フレッド！』

タンDEMがアムロが4機のバーザムを相手にしているのを見て、切り札を切ることを決意した。

フレデリックはタンDEMの意図を察して機体をWRへと変形させ、タンDEMのZプラスA2型を上に乗せる。

『全機射線上から退避、キャットチームはイーグル2と4を援護しろ』

イアンが手近のジムIIとネモで構成された小隊にタンDEMとフレデリックの支援を指示する。

ドダイ改に乗ったジムIIがハイパーバズーカで援護射撃をする、装填された拡散弾は発射されてから数拍おいて無数の鉄球を敵MSへと撒き散らす。

いくつかの機体は武装を破壊することが出来たが、重装甲のアッシマーとメインカメラを破壊されたのみですぐさま3基のサブカメラが起動を始める。

だがそれだけで十分だった、チャージが完了したタンデムのZプラスA2型がハイメガキャノンの発射体勢をとる。

『ハイメガキャノン発射！』

刹那、視界が白に染まった。

ビームサーベルがアムロのZプラスに突き立てられる直前、レナルドの機体が衝撃波で吹き飛ばされる。

『なっ……なんだこれは』

地上に叩きつけられたレナルドの機体のカメラが復活する、そこに映っていたのは戦艦のメガ粒子砲と同等かそれ以上の規模の砲撃が1機のMSから放たれている姿だった。

その砲撃はこの空域にいた多くの機体を飲み込み影法師に変えていく。

光が収まった時に残っていたのは数機のMSと自分の小隊のみだった、自分の小隊といってもその半数が失われているため実際に残ったMSは両の手で数えられる程度でしかない。

『壊滅……我々の負けか』

地面に落下したバーザムのコクピットで、ヘルメットを外しながらレナルドは一人呟いた。

この日、ラサ基地はカラバからの攻撃を受け陥落。その管轄は連邦

正規軍へと移されるのであった。

第11話 ラサの旋風（後編）（後書き）

もつすこし伸ばしても良かったかも知れませんが力尽きました。
誤字脱字等あれば報告願います。

第12話 オルタネイティブ

U・C・0087、12月1日 カナロア

カナロアの第2格納庫ではガウ改の発進準備が進められていた。

ヒューエンデン基地の打ち上げ施設の使用と出迎えの艦隊の都合がついたため、宇宙に上がる予定のガンダムMk-IVとオーガスタの人員を送り届けなければならないからだ。

護衛として第1小隊が同乗することも決まっており、既にMSの搬入は完了していた。

ガウ改は6機のMSが搭載可能な作りになっているが、大型の可変MAであるギャプラン2機にバーザム3機を積んだガウ改のカーゴブロックは余り余裕がなくなっている。

「さすがにギャプランはデカイっすね」

ハインツと共にMSの装備品を確認していたスティーブがギャプランを見上げて言う。

「そうだな、乗ってみるか？」

「お断りしますよ、こんなじゃじゃ馬乗りこなせるのはハインツ大尉がエリカ大尉くらいなもんです」

ハインツの冗談に笑いながら答えるスティーブ。彼は一度だけギャプランのシミュレーターに搭乗したことがあるのだが、その時は機

体に振り回されるばかりで全く乗りこなすことが出来なかったのだ。

「じゃじゃ馬か……違うない」

実際にギャプランを自身の乗機としている身として実感があるのだろう、ハインツがスティーブの言葉に感慨深げに頷く。

「しっかしエリカ準尉も辛いですね、親代わりと離れるなんて」「そうだな……」

スティーブの言葉にハインツは曖昧な言葉で返した。

ナナイとローレンはヒューエンデン基地のシャトルで宇宙に上がることが決まっていたが、エリカはその中に含まれていない。

衛星軌道で待機する迎えの艦隊が受け入れに難色を示したこともあるが、ローレンがそもそも彼女に余り関心がなかったことが大きい。

もちろんナナイは連れていかないということに激しく反対したが、彼女が強化人間としては失敗という事実はどうしようもなかった。

誤解を恐れずに言うならエリカは宇宙での戦闘が出来ない。

彼女の感応波はサイコミュとの連動ができるレベルであり、依存性の高い薬物による強化がされておらず精神が安定していると強化人間としては完成しているエリカであったが、それでも彼女が宇宙で戦闘を行うことは絶望的だった。

なぜなら彼女はコロニーを見るとそれをトリガーにパニック状態に陥ってしまうからだ。いわゆる外傷後ストレス障害^{PTSD}である、地球圏

に無数に存在するコロニーを見てパニックを起こす兵士など実戦で使えるはずもない。

故にローレン達が調整に必要な最低限のスタッフを残して宇宙へ上がると決まった段階で、エリカにはハインツをマスターとする再調整が施されている。ハインツが言葉を濁らせた理由はここにあった。

「いつも私は損な役回りだな……」

そういつてハインツは小さくため息をつくのだった。

「ふえつくし！あーさむっ！」

アレックスがロングコートのポケットに両手を突っ込みながらばやく。

12月に入っただばかりとは言え、冬のペキン基地の朝は突き刺さるような冷気が辺りを支配していた。

「大丈夫か？」

フレデリックがポケットティッシュをわたしながら言う。そう言う彼は全然平気そうな顔をしていた。

「なんでお前は平気なんだよ」

「寒くない訳じゃないさ」

フレデリックは普段のフライトジャケットの上からロングコートを着ているのみのアレックスと違い、革の手袋とマフラー、そして耳当て代わりにヘッドフォンをつけていた。

もともと寒さに強い体質なこともあり、この寒さの中でも彼は少し寒い程度ですんでいる。

「てかお前ヘッドフォンはダメだろ」

「無線器に繋いでるから大丈夫でしょ、お前もマイクつけてるだろ」
そういつてフレデリックはイヤホンマイクとして使っているヘッドフォンのコードの先を見せる。その先には携帯用の無線器が繋がっていた。

「……おっしゃるとおりで」

「まあ、とつとと飯食ってアウドムラにもどろろ。またどやされるぞ」

彼等が基地の外を歩いているのは食堂を使つたためだった。

現在イーグルチームこと第1小隊のZプラスはオーバーホール中であり、パイロットはやることがないためハヤトが許可を出したのだ。しかしガルダ級を格納できる設備を持たないペキン基地ではアウドムラは滑走路にそのまま止めてあるため、基地施設に入るにはある程度外を移動しなければならなかった。

「せめて車があればな」

「昨日使って充電し忘れたお前のせいだからな」

「悪かったって言ってるだろ……」

この時代の自動車はそのほとんどが電気自動車だ、充電を忘れれば当然動くことはない。今彼等が歩いているのはアレックスに原因があると言えた。

「にしてもさ、カナロアに戻るガウ改に対して網を張るって言っけどオーバーホールが終わってからにしてほしいよな」

アレックスが新たな任務の内容に対してぼやく。

「そうだな、俺達の機体はここを出る前に終わるだろうけど第2小隊のオーバーホールはまだ時間がかかる」

「まあガウ改のMS搭載数は6だろ？第2小隊の連中にネモで出撃してもらえれば大丈夫か……」

アレックスは何かを考えているのか言葉の切れが悪かった。

「どうした？」

「いや、ただちよつといやな予感がするだけだよ」

ヒューエンデン基地ではシャトルの発射準備が進められていた。

そんな中エリカは泣きそうな顔をしながらガウ改の士官室でナナイとの最後の時間を過ごしていた。

「ナナイ……」

「これからはハインツ大尉があなたのそばにいてくれる」

ナナイがエリカの頬に手を当てながらやさしく諭すが、エリカの表情はなお泣きそうな顔のままだった。心なしか目に涙を浮かべているようにも見える。

「でも……ナナイはいない……」

「私がいなくてもハインツ大尉が代わりになってくれるわ、だからそんな泣きそうな顔しないで」

「……………っ」

ナナイが泣かないように言うもののついにエリカの涙腺は限界を超え、涙が頬を伝う。

「仕方ないわね…今は泣きなさい、思いっきり」

「う……………あああっ」

エリカはナナイの胸に顔をうずめながら数分の間さめざめと涙を流し続けた。

エリカの調整に最初期から関わっていたナナイとしては彼女とはなれることは娘を手放さなければならぬ母親の様な心情であった。

本当は一緒にいたい、自分は軍属でありもとまっていた命令に抗うことなど出来ない。そのことはエリカも良くわかっているはずのことである。

ゆえに彼女達は一緒にいたいと口に出すことはしなかった、余計に心苦しくなるだけだとわかっていたから。

『シャトルの打ち上げまでそんなに時間はないぞ、乗員は早く移動しろ』

『追加ブースターの推進剤注入は完了した、これより接続する』

ヒューエンデン基地の打ち上げ施設に固定されたシャトルはその白い船体を晒しながら発射のときを待っていた。

旧世紀に運用されたスペースシャトル、オービターの流れを汲むこの大気圏往還シャトルは外見こそオービターと酷似しているが、その中身は熱核ロケットエンジンの搭載により、固体燃料を使用した追加ブースターを併用することで単独での大気圏離脱が可能な全くの別物である。

内部スペースも40人程度の人員を収容できる旅客スペースを持つなど多くの差異がある。地球各地に存在する旧世紀の打ち上げ施設をそのまま利用できる汎用性から、軍民問わずに使用されている優秀な機体であった。

その機体を守るようにティターンズのMS隊が不測の事態に備え守りを固めている。

エリカも自身のギャプランに乗り警備に当たっている。

『准尉、見送りに行ってきてもよかったんだぞ』

『……大丈夫です、行ってもまた泣いちゃうだけですから』

平静を装ってはいるものの、その声には明らかに元気がなかった。

やがてシャトルが白煙を撒き散らしながら宇宙^{そふ}へと高度を上げていく。

「……さようなら、ナナイ」

ぼやけた視界の中、エリカはそう小さく呟くのだった。

第12話 オルタネイティブ（後書き）

誤字脱字等あれば報告願います。

第13話 勘違い

U・C・0087、12月1日 太平洋

ラサ基地の後始末を現地部隊に任せ、ペキン基地での簡単な補給を済ませたアウドムラは一路カリフォルニアベースへと向かった。

北米は多数の連邦軍基地が存在しており、未だティターンズを支援している基地も少なくはない。

それらを迅速に制圧し、北米をカラバの勢力圏に塗り替えるためにはアウドムラという機動力がありまとまった戦力を運用できる部隊は適任だった。

「それにしてもラサを制圧してすぐにカリフォルニアにとんぼ返りすることになるとはな」

「押し付けたい新型でもあるんだろう、あまり言ってやるな」

ハヤトがアムロに返す。アウドムラの運用可能なMSの数、すなわちMSハンガーの数は16基であり、簡易式のものも含めればその数は倍以上にもなりえる。そして現在搭載しているMSはZプラス9機にネモ4機のため、アウドムラの運用可能MSの数には余裕があったが故に出た言葉だ。

実際にカミーユからアーガマの実験機や試作機で溢れ返っている現状を聞いている彼等にとってはなかなか笑える話ではなかった。

「それが実戦に堪えうる機体であれば文句はないんだがな」

話に聞いた機体でメタスと言う機体があった、あのような実験機に取って付けた様な武装を持たせただけの機体は御免蒙りたいと思うアムロだった。

「さすがに地上で使う機体に変なものは回されないだろう、心配のしすぎじゃないか？」

「だといいいんだけどな……」

この時のアムロには、後にガンキャノン・ディテクターと呼ばれるようになる機体の存在を知る由もなかった。

「はあ、終わった」

機体の整備を終了し、フレデリックはほっと息をつく。

カラバのようなレジスタンス組織において、戦闘時以外でパイロットがやることと言えば機体の整備くらいだ。終えてしまえば体を休めておくことが仕事だといえる。

故にフレデリックも自室に戻るべく、コクピットから出て慣れた手つきで昇降用リフトを操作しカーゴブロックの床に足を付ける。

面倒だと思っ気持ちを押さえながらフレデリックはエレベーターへと向かった。だっ広いアウドムラのカーゴブロックには複数のエレベーターが備え付けられているが、それでも居住区画に向かうにはある程度時間がかかるのだ。

とはいえ休むなら当然自室のベッドの方が疲れが取れる事は間違いなく、フレデリックは黙ってエレベーターに乗り込み居住ブロックを目指す。

だがエレベーターすぐにその動きを止めた。他に利用者がいれば止まるのは当然の事だが、フレデリックはそれを少し不快に感じた。

「フレッドか、お疲れ」

乗り込んできたのはアムロだった。フレデリック反射的にお疲れ様ですと返し、つい不快に思ってしまったことを恥じた。

「アムロ大尉は昼食、どうするんですか？」

フレデリックは言った瞬間しまったと思った。間を持たせようと昼食をどうするかと聞いてみたものの、自分はどうか決めていなかったのだ。

別にそのまま決めていないと言えはいいのだが、レジスタンス組織とは言え上官相手にそのような返事するのは少し気まずかった。

「いつスクランブルがあるかわかったものじゃないからな、食堂で軽くパスタでも食べようかと考えている」

「な、なら一緒に食べても構いませんか？」

自分の予定を聞かれないように、フレデリックはとっさに同行を申し出る。何も知らないアムロはフレデリックの態度に違和感を感じながらもその同行を認めるのだった。

フレデリックがおりるつもりだったフロアを無視して食堂があるフロアに降り立った二人は手早く食券を手にいれ食堂へと入った。

それぞれ目当ての品を受け取り席につき食事を始める。取り留めのない会話に花を咲かせながらの食事はマナーがいいとは言えないが、彼等にとっては数少ない娯楽の一つにマナーを持ち出すのは無粋というものだろう。

しかしそれは突如として鳴り響いた放送により中断せざるを得なくなった。

『総員第一戦闘配備、MS隊はただちに発進準備にかかれ。繰り返す…』

「くっ、ホークチームはオーバーホール中だというのに……急ぐぞフレッド！」

「了解！」

二人がカーゴブロックに下りた時には既にイアンとタンデムが発進準備を整えていた。出撃しないのはお互い戦闘を避けたい今の状況で敵を刺激することは戦闘の開始を意味するからである。

アムロとフレデリックも自分のZプラスに乗り込み機体を起動させる。核融合炉の聞き慣れた低い駆動音でジェネレーターに灯が入ったことを確認するとともに、それぞれハンガーに収納されたビームライフルを引き抜き臨戦体勢をとった。

いつでも飛び立つ準備は出来ているが、これが無駄骨に終わることを祈りながらもアムロはどこか知っているものを見たような感覚を感じていた。

（この息遣い、強化人間……？）

そう思った直後、一条のビームがアウドムラのカーゴブロックを貫通した。アムロは基本的に自分のニュータイプとしての懐疑的だが、瞬時に自分の感覚が間違っていないかった事を悟った。

『イーグルチームは全機出撃、ネモ各機はサイドハッチから援護しろ！』

アムロが指示を飛ばしながら、自分も後部ハッチへ機体を向ける。

『アムロ、Zプラス、出る！』

青と白のツートーンカラーで彩られたZプラスが蒼海の空へと飛び立っていった。

気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い
気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い
気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い

誰かが私を覗いている、許せない。

何も知らないくせに、私の中に入ってこないで。

アウドムラから青と白で塗られた機体が出て来る。この感覚、きつ

とあいつだ。

『私を見透かす奴、消えてしまえ!』

青い奴に向かってビームを撃つ、けどあいつは消えてくれない。

放っておいてほしいのになんで関わろうとするの？

私は泣いちゃいけないのに、あなたの心を感じていると泣きたくなくなつて来る。

ああ、ハインツ大尉のギャプランだ、こんな顔は見せられない。

『来ないで、ハインツ大尉……』

青い奴の射撃をかわしながら私は小さくつぶやいた。

1機の可変機のウイングバインダーをビームライフルで吹き飛ばす。
海面に落下したその機体は別の敵が回収して母艦に戻っていったけど、まだ青い奴は残っている。

ハインツ大尉がなにか言っているけど雑音にしか聞こえない、とにかく今はあの不愉快な奴をこの場から消し去りたい。

青い奴がビームサーベルを抜いて接近して来る。ハインツ大尉の援護射撃と私の射撃を少し過剰な動きで回避しながら速度を落とさずに迫ってきた。

『来ないでッ!……ッ!?!』

青い奴の後ろに気配を感じる、それは私を見透かした奴の気配だった。

なんで！？青い奴もこいつもなんでこんなにも私を不愉快にさせるの？

動揺した私はビームをめちゃくちやに乱射する。青い奴はそれを回避するために離れていったけど後ろの1機は私の機体に組み付いてきた。

『！……イ……イヤアアアアアアア！……！』

こいつだ、こいつが私を覗いた奴だ。

『どうしてそう拒絶ばかりするんだ、それじゃあずっと一人のままじゃないか！』

『一人のままでいい！』

また一人になるのが怖いから、一人になるくらいならはじめから一人だった方がいい。

『准尉、命令だ、戻れ』

数条のビームが至近距離を掠めると共にハインツ大尉の低い声が耳朶を打つ。刹那、私の思考は停止した。

『了解です』

そつだ、最初からそうしていればよかつたんだ。大尉に従つていれば私は間違わずに済む。

グレーの敵機を突き飛ばし、私はガウ改へと戻るのだった。

『退いた……か、アレックスは大丈夫か？』

アムロが敵のギャプランが撤退したのを確認し、ギャプランと肉弾戦を演じていたアレックスを気遣う。

『大丈夫……です』

アレックスは平気だと言うがその顔色はあまりよくはなく、声音も頼りないものであつたためそれが強がりであるのは明白だった。

開け放たれたバイザーの下には汗が浮き出ているのが見て取れる。

『……声を聞いたんです』

『そつか』

やはりとアムロは思った。あのギャプランに組み付いた時のアレックスの言葉は、少なからず相手の心を垣間見なければ出てこないからだ。

『とにかく今はアウドムラに戻ろつ、話はそれからだ』

『了解です』

アムロとアレックスはW R形態のZプラスをアウドムラへと向けるが、アレックス機体はどこか遅く感じられた。

アウドムラのMSハンガーに機体を固定したアレックスはコクピットハッチを解放し、メットを脱いで息を吐く。

息を整えながらシート裏のバスケットに入れていたタオルを手に取り顔を拭う。かすかに入ってくる潮風が肌に心地好かった。

不意にポケットに違和感を感じる。携帯端末の着信を知らせるバイブレーション機能だ、反射的に手にとって内容を確認してみるとアムロからメッセージが届いていた。

【レストルームで待っている】

メッセージを見たアレックスは携帯端末をポケットにしまい、昇降用リフトを使いカーゴブロックへと降り立ち、レストルームへと向かう。

レストルームは昼食時というのもあり人影はまばらだった。そのため軽食をとっているアムロを見つけることは容易だった。

「アムロ大尉、来ましたよ」

「アレックスか、とりあえず座るといい」

アムロの言葉に従い、アレックスは先程手に入れたハンバーガーを片手に丸テーブルを挟んで反対側の椅子に腰掛ける。

「食べながらいい、さっき何があったか聞かせてくれないか？」

「わかりました」

そう言つてアレックスはハンバーガーを食べながらも先程の戦闘での出来事を話しはじめた。

「声を聞いたんです、とても寂しそうな」

自分でもありえないと感じつつもギャプランのパイロットが周りを拒絶しているという奇妙な確信があつたことを重ねて言つ。

アムロはそれを黙つて聞いていたが、アレックスがひとしきり語り終えた段階でおもむろに口を開いた。

「……君はニュータイプかもしれないな」

アレックスから聞いた話しから判断するにアレックスはニュータイプの素養を持っていることは間違いない。

能力にこそ懐疑的なスタンスをとるアムロであるが、自身がニュータイプとして経験したことからいくつか話しておきたかつた。

しかし、カミーユと自分の悲劇を繰り返させたくないという思いがアムロの口を重くさせていた。

「どうかしましたか？」

アレックスがアムロの伝えたいことはあるが言葉に出来ないといった様子に気がついたのか、ハンバーガーの包みを器用にごみ箱に投げ入れながらアムロの顔を窺う。

「……アレックス、深入りするなどは言わない。けれども彼女が敵だということを忘れるなよ」

アムロが搾り出すように言葉を紡ぐ、それに対しアレックスははい、と頷くことしか出来なかった。

第13話 勘違い（後書き）

一人称に挑戦してみました。

誤字脱字等あれば報告願います。

第14話 雲の下で

U・C・0087、12月2日 キャリフォルニアベース

キャリフォルニアベースの第二滑走路はまたしてもアウドムラが占有する形になっていた。

ガルダ級を格納できる設備を持たないキャリフォルニアベースでは仕方の無いことなのだが、無骨なアスファルトに佇む橙色の派手な塗装を施されたアウドムラはなんともミスマッチだった。

修理のために両舷に設置された足場がその違和感を緩和しているようにも思えるが、気休めでしかないだろう。

開け放たれた後部ハッチからは物資の搬入が進められていた。

基本的にはMSの予備パーツなどが入ったコンテナをMSで運び込む作業だが、作業を手伝うわけでもなくただアウドムラに入っただけのMSがあった。

ネモと同様にグリーンのエウーゴカラーに塗られた重厚なシルエットを持つその機体はコンテナを運び終えると、そそくさとハンガーにその身を預けた。

「なんだあれは」

ハヤトと共に搬入された物資の確認をしていたアムロが怪訝な声をあげる。

「1機新型を回すと伝えられていたが、あれがそんなんじゃないのか？」

ハヤトも詳しくは知らないようであり、自分の推論を述べるのみだった。

「MSA-005K、陸戦型メタス砲撃仕様ですよアムロ大尉」

そうアムロに言ったのはZプラス配備の際にもたちあつたアナハイム・エレクトロニクス社のキム・ハル技師である。

「メタスのフレームを流用し、陸戦用支援MSとして再設計を施した機体です。本来は2機こちらに届ける予定でしたが諸事情で1機のみになってしまいましたかね」

「……その諸事情というのは聞かないことにするが、メタスのフレームを使っている強度は大丈夫なのか？」

アムロがキムに疑問をぶつける。彼がカミーユから聞いていたメタスの概要はとも砲撃戦に耐えられるような構造をしていなかったからだ。

「その点は安心してください、陸戦でも十分砲撃戦が可能なレベルの強度は持たせてあります」

もちろんだとアムロは返し、再び視線を陸戦型メタスに移す。

「それにしてもアムロ、この機体ガンキャノンとよく似てるよな」

傍らで陸戦型メタスを眺めていたハヤトがそんな感想を漏らす。

確かにそうだなとアムロは思った。両肩のビームカノンと大型の専用ビームライフル、丸みを帯びた装甲はかつてホワイトベースに搭載されていたRX-77ガンキャノンを髣髴とさせる。

「ガンキャノン……ガンキャノンディテクターって愛称はどうだろうか」

「いいんじゃないんですか、長ったらしい名前ですし愛称があってもいいと思いますよ」

キムがハヤトに賛同し、アムロが「赤く塗れば完璧だな」と付け足す。

「大尉、ちょっといいですか……？」

そんな他愛のない話しをしていた彼等に割って入った人物は見かけない顔だった。

「見慣れない顔だな、新入りかい？」

「ええ、ジャン・ブラウアー中尉です。こちらはルドルフ・ゲータ少尉」

ジャンとなのである男が横にいる痩せ型の男を指して言う。

「はじめまして。お会いできて光栄です、アムロ大尉」

そういつてルドルフはアムロに右手を差し出す。アムロはよろしくといってその手をとった。

「我々はグレイ基地まで同行する予定になっています、運搬予定のZプラスをどちらに固定したらいいのか確認してきました」

「奥にスペースがあるからそこにハンガートレーラーを固定しておいてくれ」

ハンガートレーラーとは荷台をたてることで簡易なMSハンガーとして使える車両のことである。

もともとカラバの部隊のほとんどはゲリラの様相を呈する小規模部隊がほとんどであったため、多くの部隊で使用されていたものであり、アウドムラでは簡単にMSの運用機数を水増しできるとある程度の数が搭載されていた。

わかりましたと頷いたジャンはZプラスを動かしていくのだろうか、ルドルフと共にカーゴブロックから出ていった。

「俺が宇宙に？」

アムロは鳩が豆鉄砲を食らったかのような表情でベルトーチカに聞き返した。

「ええ、Zガンダムの受取のために一度宇宙に上がってほしいの」

ベルトーチカはさも当然といった様子で繰り返すが、それはアムロが宇宙に上がることを怖がっていることを知った上での事だから性質が悪い。

「それ……やっぱり俺じゃなければダメだよな？」

「アムロ以外に誰が行くというの？」

アムロが苦い顔をしながら唸る。Zガンダムには興味があるが、それでもアムロは宇宙に上がること、いやラアの魂に出会ってしまふ事に恐怖心を抱いていた。

「衛星軌道までエウーゴの艦^{ふね}が来てくれるわ。そこで受け取るだけだから大丈夫でしょ？」

「いや、Zなら大気圏突入させるといふ事も出来るだろう」

Zガンダムはウェイブライダーへの変形を可能とする可変機だ、当然単独での大気圏突入が可能である。

「ぱつと行ってぱつと戻って来るだけじゃない、そんな弱気なアムロは見たくないわ」

「……わかった、俺が行く」

相も変わらず苦い顔をしながらも、アムロは渋々宇宙に上がることを受け入れた。

「流石アムロ、話がわかるのね」

「皮肉のつもりか？」

「さてどうかしらね」

アムロの言葉を自然に受け流しながらベルトーチカは戻っていった。

「はぁ……またケツを叩かれたか」

自己嫌悪に思わずアムロはため息をつく。宇宙に上がることを躊躇していることはもちろんだが、毎回女性に奮い立たせられて動く自分を情けなく感じていたからだ。

「男なんてそんなものじゃないのか？」

「ハヤトか、ハヤトもなにか心当たりがあるのかい？」

「俺がカラバに参加したのもフラウに尻を叩かれたからだしな、心当たりならいくらでもあるよ」

そういつてハヤトはアムロにドリンクのボトルを手渡す。その顔はなぜか疲れたような表情を浮かべていた。

「ありがとう……まあ確かに一年戦争のときはよくセイラさんに破かけられてたもんな、そんなものか」

ボトルを空け一口飲みながらアムロがいう。よく冷えたスポーツドリンクは体に染み渡るようにアムロには感じられた。

アウドムラはシアトル付近のグレイ基地へと進路を取っていた。

西海岸はカラバの勢力が強い地域であるため比較的安全な地帯とは言えるが、行方をくらましている一部のオーガスタ基地のスタッフ

や潜伏しているティターンズの部隊などの襲撃は十分考えられることであり、未だ気を抜ける状態ではなかった。

特に行方不明のオーガス基地のスタッフはニュータイプ研究所の被検体を伴っているとの未確認情報もあるため、無視できない脅威の一つとして認識されている。

『もし降りたら戦闘中なんてことになっていたらシャトルは捨ててもかまわないからな』

そんな中アムロのシャトルの打ち上げ準備が進んでいた。もともとブースターの取り付けや推進剤の注入と言った作業は終わっており、最終調整を残すのみだった。

『了解、俺が帰ってくる場所をなくさないでくれよ』

アムロはハヤトとお互い軽口を叩きあいながら最終調整を進めていく。

やがて最終調整が終わり、秒読みが二桁を切った。

『4、3、2、1……レディ、ゴー』

アウドムラの翼下に固定されたシャトルが白煙を撒き散らしながら上昇を始める。

あっという間に高度を増していったそれはしばらくすると一つの輝点にしか見えなくなっていた。

第14話 雲の下で（後書き）

誤字脱字等あれば報告願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3963/>

機動戦士ガンダム0087～蒼天の戦士たち～

2011年11月15日01時29分発行